

---

# カテキョ怪談

えつ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カテキョ怪談

### 【Nコード】

N4345U

### 【作者名】

えつ

### 【あらすじ】

靈感もちの家庭教師に聞いた怪談。

## 高橋さん

高校受験をひかえた中学二年生の夏。

進学校めざしてるくせに成績がどん底だった私に、親が家庭教師をつけた。

「よろしく」

「……よろしくお願いします」

人見知りするから少し不安だったけれど、初めての授業の日、玄関で母の肩ごしに目が合ったとたん「あ、なんか大丈夫かも」と力が抜けた。

上手くいえないが、第一印象で気が合うかどうかわかる時ってあると思う。

あとから「思ってたのとぜんぜん違う！」となることもあるから、あまりアテにはならないが、話しやすく優しいような人に見えた。

名前は高橋さん。

教え上手でおしゃべりな爽やかイケメン大学生。

背は平均より少し高いくらいで、家庭教師だけあって真面目そうな外見。少々ミスしようが宿題をやり残していようが、嫌な顔一つせず優しく教えてくれる。そのせいか、私はすぐになついた。漫画や動物が好きなど、いくつか共通点があったのも大きいかもしれない。

おかげで、勉強がほんのり面白くなってきたある日の夜。

私はいつものように自分の部屋で高橋さんとイスを並べ、机に向かっていた。

窓からは生ぬるい風が入ってきて、じんわりと暑い。

めずらしくセミの声がしないせいか静かで、扇風機とシャーペンを走らせる音だけが室内に響いている。

そんなとき、ふわりとフローラル系の香水の匂いがした。

男物にしては甘すぎるし、たまに高橋さんがつけているものとは

系統が違う。

移り香ってやつかな、なんて下世話なことを考えていたら、「ぎしっ」とだれかが背後のベッドに座った気配がした。

え？

室内には私と高橋さん以外だれもいない。

そして彼はずっと左に座っている。

さっき確かにベッドが人の体重でしんだ音がしたと思ったが、ふり返ってもそこにはなにもない。

なんだか背筋がぞわぞわした。

ただの気のせい、かな。

気をとり直してテキストの続きを解いていると、頭のすぐ上で「はあ……」とため息が聞こえた。

まるでだれかにノートをのぞきこまれたような距離だと思ってしまつて、ぞわつと全身に鳥肌が立つ。

明らかに女性の声だった。

幻聴にしては嫌に生々しく、隣家の声にしては近すぎる。

ため息がした辺りや部屋中をみわたすが、やっぱり他にだれもない。

恐怖にかられて高橋さんをふり返ると、彼はこちらを見てニヤニヤ笑っていた。

「わかる？」

「え？」

「わかる？」

あまりに落ちつきはらった態度なので、解いている最中の問題のことを聞かれているのだと思った。

「あ、まだ考え中」

我に返ってみれば、下の階には家族もいるし、同じ部屋に高橋さんもいるのに幽霊だなんだと騒ぐのは恥ずかしい気がした。

勉強が嫌だからボイコットするつもりだと思われるかもしれない。あわててテキストに向き直ると、意味不明なことを言われた。

「大丈夫。ちゃんと連れて帰るから」

何のことだと思ったが、「30分で」と言われた問題の制限時間がせまっていたので、その日は聞き流した。

後日、同じく家庭教師の時間。

高橋さんが軽く告げた。

「実はあのとき、肩に女が乗ってたんだ。大学からついてきちゃってさ」

「女？」

冗談めかした口調だったのでツツコミまちかと思ったが、「電波あつかいされたらヤだな」という保険のようにも見えたので、私は普通にしていた。

第一、オカルトは大好きだ。

「そう、悪いもんじゃないんだけど。ずっと服ひっぱってくるし寒いし肩こるし、まいった」

こんな感じ、とつんつん服をひっぱってくる。

風がそよぐ程度の力だが、さすがにちょっと気味が悪い。

「変なの連れてこないでよ」

つい身を固くすると、高橋さんが笑った。

「大丈夫、もういないから」

自分が怖い目にあうのは嫌だけど、怪談を聞いたり話したりするのは大好きだ。

そんな私が靈感もちの家庭教師に怪談をせがむのは自然の摂理と  
いうか、レンジに卵を入れたら爆発するのと同じくらい当然で、これはその内の一つ。

「大学にでる教室があるんだ」

授業の合間、たくさんテキストを広げた机の前で高橋さんがいった。

「黒い人影、白目がない女、普通の人。見るやつによって証言はバラバラだけど、目が合うと家までずーっとついてくるってのが共通点で。もう一度その教室に行くまで毎晩金縛りにあうんだってさ。面白そうだろ？」

「聞くだけならね」

私だったら絶対行かないが、彼はくだんの教室をのぞいてみたらしい。

夏休み中のオープンキャンパスで人はごった返していたが、その教室は使われておらず、がらんとしていた。

その中に、ぽつんと席に座る女。

ここの学生だったんだろう、二十歳くらいで、黒髪のショートカット。ニットの長そでにジーンズと明らかな冬服で、憂鬱そうに頬杖をついている。

目が合うと、これまた無愛想についてきた。

「自分の家も、どうしてずっと教室にいるのかも思い出せないから、とりあえず目が合ったやつについて行ってるんだってさ」

「それってまさかこの前の」

顔を引きつらせると、彼は笑顔でうなずいた。

「そ。この家にいる間とか、俺の家についた時とか」ちがう、ちがう、ここじゃない”って俺の服ひっぱりながらずーっとぶつぶつぶつぶた」

「それで、その人どうしたの？」

まだこの部屋にいますかというんじゃないだろうな。

「ん？ 教室に戻したから、まだあそこにいるんじゃない？ 昼も夜もずーっと。それか、別のやつにくつついてるよ」

「ついてこれたら嫌だけど、ちょっと可哀想だね」

うちわで扇ぎながら告げると、意味深な瞳がこちらを見た。

「同情すると憑かれるよ」

「その大学には行かないから平気」

高橋さんがけけら笑う。

「あんなの怖くないって。前もいったけどそんな悪い奴じゃないから。あれより下の階のほうがよっぽど怖い」

「何があるの？」

「ベタだけど、トイレ。掃除してあって清潔感はあるし、ちゃんと電気ついてんのになんか全体的に暗い。ふっと顔上げたら個室にでっかい顔がすごい形相で浮かんできてさー。それからあそこは使ってない。見えてない奴でもなんか怖いってすぐ出てくるし」

その話を聞いて、私はある事を思い出した。

一時期よく通っていたデパートがあるのだが、そのトイレが高橋さんの話と同じように『電気がついているのにとっても暗い感じがして、不気味で背筋が寒くなる』トイレだったのだ。

他に人がいなければ怖くて入れない不気味さだったのだが、そのデパートには他のトイレがなかったため、我慢して何度か使っていた。

とはいっても、怖いだけで害はなかったけれど。

高橋さんが帰ってから、パソコンでそのデパートの名前、トイレ、などのキーワードで検索してみる。

適当にクリックした記事にはこう書かれていた。

「デパートのトイレには逆さづりの女の幽霊が出る」

## 夏の盛。

じつとりした熱気に包まれたある晩、私は友達と五人で花火大会へ出かけた。

駅でまち合わせして、河川敷へ歩く。

花火が始まる前に晩ご飯と飲み物を買に行こうという話になったのだが、全国的に有名な花火大会だからかどこの露店もすごい人混みで、並ぶだけでも苦勞しそうだった。友達の一人が靴ずれをして足が痛いと訴えたこともあり、買いに行くものと残るもので分か

れることにした。

私は買い出し組になり、明里という友達と二人で人混みへ入った。アイドルみたいな雰囲気のある、華やかでお洒落な子だ。この日も大きな髪飾りがピンクの浴衣によく似合っていた。

花火を観るポイントと露店は離れており、けっこう歩く。

やがて、ものすごい渋滞に入ってしまった。

道が満員電車みたいなのだ。

視界がすべて人で埋まっていて進む速度も遅いが、ここを抜けないと露店へ行けない。

早く座って花火を観たかった私はちよつとでも先へ進もうと躍起になっていた。

前の方へ進めそうなスペースができたので、「あそこへ行こう」と明里をふり返る。

同時に彼女に手をつかまれた。

「引き返そう」

「えっ」

せつかくここまで来たのに。お腹も空いたしのども乾いたし。

そう思ったが、次の一言で頭が冷えた。

「こんな所にいたら将棋倒しになる」

いわれてみれば。

周囲は満員電車もかくやと言わんばかりだし、彼らは前へ進みたくてイライラしている。

私も彼らと同じだったわけだが、こういう状況で理性的に物事を考えられる彼女は賢いなあ、とちよつと尊敬したのを覚えている。

普段から明里は賢いが。

私は友達に手を引かれるまま、元来た道を引き返していった。

しばらく歩いて、

「晩ご飯どうしょつか。遠くの夜店に行ってみる？」

他の友達の分も頼まれてるしとつぶやくと、ようやく彼女が足をゆるめる。



「あたし、今から帰ろっかなあ」

「え？　なんで？」

いつの間にか、明里はひどく青ざめていた。

「ひなちゃん、今どこ通ってきたか覚えてる？」

「どこって……」

ついふり返る。

後ろにさっき通ってきたばかりの道がある。

大きな鉄橋の下で、他の場所より一層うす暗い。

そこにはだれもいなかった。

今の今までおぼろげに見えていたはずの露店の灯りや、上に飾られていた提灯もない。

少し目を離れたすきに、花火会場から外れたどこかへ迷いこんでしまったかのようだ。

「……さっきまで、いつぱい人がいたよね？」

ずっと人の川が続いているかのように、道の先まで人で埋まっていたはずだ。

「あたしにはみんな黒こげに見えたけど」

背筋が寒くなった。

その後、まっていた友達には「すごい人混みで買えなかった」とだけ告げ、花火を鑑賞してからファミレスで食事をして帰った。

帰り道にはなにもおこらなかった。

ただ、あるとき明里が「引き返そう」といわなかったらどうなっていたのかと考えると、しばらく夜に出歩く気にはなれなかった。

「変なところ行っただろ」

家庭教師の日、来るなり高橋さんが指摘した。

なにも話していないのに確信に満ちていて、「やーいやーい」とはやしたてそうな笑顔だ。

「の花火大会に行っただけだよ。変な目にはあつたけど」  
詳しく話すと、

「ハイハイ、あそこね。あの鉄橋の下のことだろ。俺も行っただことあるけどあそこよく出るよ。知らなかった？」

そんな事をいわれて絶句する。

大学にトイレに河川敷までそうなんて。

「全国、心霊スポットだらけじゃん……！」

「うん、幽霊なんてそこらにいるよ」

私の宿題をパラパラめくりながら、高橋さんが笑う。

「ひなだけだったら何もなかっただろうけど、たぶんその友達がひかれやすい体質なんだろうな。でもその子が引き返してくれたんだから、イイお友達じゃん？」

「うん」

私の名前は”ひなた”だが、高橋さんは”ひな”と呼ぶ。呼びやすいのかわからないが、友達にもそう呼ばれることが多かった。

「次のカテキヨまで怪談はやめといた方がいいな。怖い話は読むのも聞くのも観るのも禁止。楽しいことだけ考えな」

バシ、と高橋さんに軽く背中をたたかれた。

「あとは……怖かったら窓に塩盛つとけ」

だんだん不安になってくる。

あれからなにもないけれど、実は危なかったりするんだろうか。

「自分の部屋だけでいいの？　ていうか何かいるの？」

「この部屋だけでいーよ」

「なにかいるの？」

「次くる時まで怖い話は禁止っていったろ」

そんなこといわれたら余計気になる。

不満げな視線を送ると、高橋さんはぽつりといった。

「茶、飲みすぎ」

彼が来てから約30分。

その間に私はお徳用ペットボトル二本分の麦茶を消費していた。

「何かあったら電話しておいで」  
授業が終わったあと、不吉な言葉とともに高橋さんは帰って行った。

「怖かったら盛り塩」ということは特にやらなくても問題ないだろうと判断して盛り塩はせず、楽しいことをしろといわれたので、その夜は友達に借りたDVDを観ていた。

あまり興味のないドラマだったが観てみると面白く、気づけば夜中の二時四十分になっていた。

部屋にテレビがないのでパソコンで観ていたのだが、いきなり部屋の電気だけがフツと消えた。

モニターの光だけが目に焼きつく。

DVDは何事もないかのように再生されている。

反射的に肩がはねたものの、すぐに電気のスイッチを押す。

部屋の電気がついた。

電球の接触が悪いんだろうか。そろそろ換え時かもしれない。

そんな事を考えて、その日は切りの良い所までDVDを観て眠った。

コン、コン。

恐怖を覚えたのは翌日の夜からだった。

いつも眠ると朝までおきないのだが、その日はどこからかノックの音がして夜中に目が覚めた。

まだ眠たいので構わずに目を閉じていたら、「コン！」とひときわ大きな音。

少しイラッとして目を開けると、暗い室内で時計の針だけがぼんやり光っていた。蛍光塗料がぬられたそれは3時前くらいをさしている。

辺りを見回すと、真横から「コン、コン」。

それはベッドの真横にある窓の外から聞こえてきていた。

「……」

背中がヒヤリとする。

私の部屋は二階にあるし、窓の下に足場もないから人間じゃないふと「幽霊的なものが外から窓をノックしていたらどうしよう」と嫌なことを考えてしまった。

でも、今は夏だ。カブトムシやカナブンが窓に体当たりしているだけかもしれない。

そうは思ってもカーテンを開けるのが怖かった。

まともに幽霊らしきものを見たのはあの花火大会が初めてだし、それすらもよく覚えていない。今までそんな感じだったんだから、これから幽霊を目撃する可能性は低い……と思いたい。だいたい行きたくて心霊スポットに行ったわけじゃないんだし、祟られる覚えもない。

でも、万が一窓の向こうに嫌なものが見えたら。

それが虫じゃないことが確定してしまったら。

コン、コン。

音はずっと続いている。

私はそつとベッドをぬけだし、壁にある部屋の電気のスイッチを押した。

つかない。

ぶわつと嫌な汗をかいた。

カチカチ、カチカチ、カチカチカチカチ。

何度も何度もスイッチを押すが、反応がない。

パニックになりそうになって、昨夜のことを思い出す。

単に電球が切れたただけだ。他の部屋の電気ならつくかもしれない。だが、この状況でドアを開けて真正面にあるトイレを見るのが怖かった。

怖い話にトイレはつきものだ。

しかも、この前の「トイレに出るという逆さづりの女」が頭に浮かんでしまつて余計怖い。いくら何でも自宅のトイレには出ないことくらいわかつているが、怖いものは怖い。

かといって、窓のそばのベッドで寝直す度胸もない。

かなり迷い、ためらつたあげくにドアノブに手をかけた。

廊下はまっ暗だが、すぐそばに両親や姉のいる部屋がある。姉をたたき起こして一緒に寝てもらおう。

そう思っていたのに、ドアは開かなかった。

私の部屋にカギはついていない。

たてつけが悪いわけでもない。

ドアノブが動かないのだ。

それも奇妙な感触がする。力加減によつて動く範囲が違う。軽く手をかけたただだとぴくりともしないが、思い切り力をこめると一瞬ドアノブが動いて、その後すぐに戻されるのだ。

まるで、だれかが外からドアノブを押さえているみたいで気持ち悪い。

もう泣きそうだった。

大声で助けを呼ぼうか。でも夜中だし。緊急事態ということ。いやでも大声を出したら逆に窓やドアの外にいる何かからリアクシ

ヨンがあつて怖いかもしれない。

「……」

どうしようもなく、私は壁を背に座つて窓を見ながら朝をまつた。窓にはカギがかかっているが、ドアから入つてこられたら怖いのでドアの前にはイスを置いた。

やがて外が明るくなり、新聞配達之音が響いてくる。

気がつくとき窓の音は消えていた。

おそろおそろ電氣のスイッチを押す。

普通に電氣がついた。

電球も切れていないらしく十分明るく、点滅するような様子もない。

イスをどかして部屋のドアノブに手をかける。

今度はちゃんと開いた。

もう、大丈夫だ。

部屋のカーテンを開けた。

窓はすすだか土だか、得体のしれない茶色いもので汚れていた。

それから姉のベッドにもぐりこんで眠り、昼ごろ高橋さんに昨夜の出来事をメールした。

「水とか線香とかお供えしたほうがいいかな？」

明里が「みんな黒こげに見えた」といつていたのと、あれからずつと異様にのどが渴くのは何か関係があるかもしれないと思つたからだ。窓についていた茶色い汚れも気になる。

火事か何かで亡くなつた人たちが憑いてきているのでは？ といふのは考えすぎだろうか。

高橋さんからの返信は。

「仮に水が欲しくてたまらない100人がいたとして、その内1人だけに水をあげたらどうなると思う？ 一生そういうのとき合い

たいなら別だけど、そうじゃないなら何もしない方がいい。全部ただの気のせいだと思え」

との事だったのでお供えはやめておいた。

夜は姉に事情を話し、一緒に寝させてもらうつもりでいたのだが、「今日から友達とキャンプ行くから。グッドラック！」

そんな一言で薄情者は午後にはいなくなってしまった。

こうなったらお母さんと……と思ったものの、中学生になってまで母親と一緒に寝るのはいかなものか。

結局、廊下で暑そうにのびていた愛猫チャロを拉致してリビングにすすわった。

トラ模様のオス。おデブだがだれにでも愛想のいい、かわいいやつである。

念のため、自分の部屋とリビングの窓には塩を盛ってある。

あられもない格好で眠るチャロを横目に、私は安心してコメディドラマを観た。

深夜の2、3時が怖いと感じるようになっていたので早く寝るつもりだったのだが、夏休みで少し体内時計が狂っていて寝つけず、そのまま2時を過ぎてしまった。

軽く緊張しつつ、チャロの腹をなでる。

こちらの心境などお構いなしに笑うドラマの俳優の声と、時計の音だけが室内に響いている。

……なにもおきない。

一応3時を過ぎてから眠ろうか、とうとうとしていたとき、唐突にテレビの電源が切れた。

もちろんリモコンには触っていない。

十歩くらい離れたテーブルに置いていたリモコンをとってスイッチを押す。

テレビがついた。

が、リモコンをテーブルに戻したとたんにもたまたまた消えた。だんだん背中がぞわぞわしてくる。

電源のついていないテレビのまっ暗なブラウン管に幽霊が映っていた、なんて怪談でよく聞く話だ。嫌だぜったい見たくない。

リモコンから電池をぬき、直接テレビをつける。

今度は消えなかった。

が。

「ニヤアン」

床で万歳して転がっていたチャロが、リビングの窓に向かって鳴いた。

この猫が家の外へ遊びに行くのは日常茶飯事だが、鳴くのは珍しい。外へ出して欲しい時は無言で足に身体をすり寄せるか、人の手に自分の鼻をタッチしてくる。そういう風に教えていた。

チャロはじいっと窓の外を見つめている。

今夜は一人じゃないし、と勇気をだしてカーテンをめくるがそこにはなにもない。墨をぬったような暗闇にうつすらと外の景色が映っているだけだ。

チャロを抱き寄せ、テレビをつけたまま毛布を被った。

暑かったせいかチャロはすぐ床に逃げたが、それから奇妙なことはおこらなかった。

……そう思っていたが、朝目をさますと母が青ざめた顔つきでベランダに塩をまいていた。

ベランダはリビングの窓を開けてすぐの所にある。

「なにやってんの？」

問うと、母がそそくさと中へ入ってくる。

「チャロを外に出そうとして窓を開けたら、一瞬ベランダに黒い影がいたの」

あ、やっぱりいたんだ。

彼女には家庭教師に靈感があるらしいことも、我が家で怪奇現象がおこっていることも知らせていない。けれど、母は幽霊を見るのが嫌で毎晩電気をつけて寝るほどで、過去にも何度か幽霊を目撃したり予知夢らしいものを見たりしていたので納得した。



その晩は怖いことはおこらず、翌日の夕方に高橋さんが授業にや  
ってきた。

「どうだった？」

私の部屋に入るなり、面白がるように問う。

「ちよつとあせつた」

数日間の冷や汗体験を話すと、少しつまらなそうというか、ひよ  
うしぬけしたような顔をした。

「ひなはホント見えないんだな。一度ヤバめの心霊スポット行って  
みるか？ 見えるようになるかもよ」

「ぜつたい行かない」

そもそも見たくない。

速攻でお断りすると彼はおもむろに席を立ち、イスの後ろに回っ  
て背もたれを片手でつかんだ。

「なに？」

「背もたれがひなの肩な。このまえ来たとき、こんな感じで黒こげ  
の骸骨がひなをつかんでたわけ。で、それを」

もう一つの手でバシッとふり払う。

「こんな風にしたらから怒って微妙な出来事をおこすようになったと  
「そういえば、花火大会に行った日の翌日は大丈夫だったような…

…あと、昨日も平気だったけど」

高橋さんが笑った。

「お盆が終わったからな。もうなにもないと思う」

本当にしばらくはそうだった。

私には靈感もちつぱい知り合いが数人いる。

その内の一人、クラスメイトの戸和<sup>とわ</sup>さんは「他人の守護霊が見え  
る」と評判で、軽い占いや霊視もできるらしく、クラスメイト以外  
にもいろんな人が彼女に頼んでいる姿をたまに見かける。私も他の

子達のように守護霊を見てもらいたかったけれど、仲良くもないのにそんなミィハーな頼みごとをしたら嫌われそうで、頼んだことはなかった。

ある日、学校の休み時間にクラスの女子だけでカラオケに行こうという話になった。

友達が行くので私も行くと答え、近くにいた戸和さんはどうするかたずねると、

「私いそがしいから行かない」

愛想よく笑って彼女はいい切った。

靈感がある、というと暗い感じの子を想像しがちだが、戸和さんは高橋さんみたいに明るくて社交的なタイプの子だ。態度もサバサバきびきびしていて、野球かサッカー部あたりのマネージャーに似そうなイメージがある。

オカルト関係の話題も自分から積極的に語ることはせず、知っている人から問われたときは正直に答えている。ひけらかさないが、かくしもしない。そんな彼女のスタンスがひそかに好きだった。

「そっか、残念」

「行かないほうがいいよ」

小声でささやかれてギョツとする。

「なんで？」

「奈緒美ちゃんなおりが行くから」

奈緒美ちゃんはクラスのリーダーみたいな子だ。私はまだ話したことがなく、好きでも嫌いでもない。

「嫌いな？」

「こちらこちらも小声でこそつと問う。

「苦手かな」

それきり、彼女はさつと立ち上がってトイレに行ってしまった。

## ナオ

カラオケ当日。

店内で一時間ほど過ごしたころ。

何回目かに奈緒美ちゃんが歌っていたら、だれかが「気持ち悪い声をする」といい出した。

「歌声が気持ち悪いなんて失礼な」と冷や汗をかいたが、明らかに奈緒美ちゃんではない声が曲に混じっているのに気づく。

「おおお」だか「あああ」だか知らないが、男とも女ともわからない奇妙なもの。

クラスメイトたちは小声でざわつき、友達の沙也は頭を押さえてうずくまってしまった。

明里は今日他に用事があったので来ていないが、沙也は明里と同じくらいよく遊ぶ子だ。

ボーイッシュな外見でたまにきつい物いいをすることもあるが、友達思いで面倒見がよく、サバサバしている。

「大丈夫？」

「……頭いたい」

それきり、黙りこんでしまう。

彼女を介抱、というかただ単に見守っていたら、他のクラスメイトが奈緒美ちゃんに声をかけて曲を止めた。

「なに？」

彼女が首をかしげると同時に、ハッキリ不気味な声が出た。

「ナーオー、ナーオー、ナーオー、ナーオー、ナーオー」

奈緒美のナオ？

その野太い、間延びした声は彼女を愛称で呼んでいるように聞こえた。

私をふくめ、室内にいた全員がぞっとこおりつく。

声は一度かぎりではなく、ずっと続いている。

ふと、ネコのおたけびに似ていると思った。うちのチャロもたまにこんな声をだす。

だれかが奈緒美を呼んでいるわけではなく、野良ネコが迷いこんでいるか、機械の故障かもしれない。

他にもそう思った者がいたらしく、9人のうち2、3人が声のするあたりへ寄っていった。部屋の右隅あたりからのようだが、そこにはなにもない。私も後ろからのぞきこんだけれど、壁しかなかった。

隣に部屋はないし、外にいるのかもしれない。

「ちよつと壁の反対側みてくる」

そう告げると、沙也がついてきた。

「大丈夫？」

「外のほうがマシ」

そういうものか。

壁の反対側はただの廊下で、ネコも何もいなかった。

沙也が「このまま廊下でまってる」というので荷物をとりに部屋へ戻ると、さらにパニックがおきていた。

「テレビに逆さまの女が映った！」

”女幽霊は逆さまでなければならぬ”という法律でもあるんだろっか。

一人でいるときにこんな状況になったら泣きわめくけれど、あいにくその場には私をふくめて八人もいたのでまったく怖くなかった。ちなみに、すでにさっきの声は消えていた。

クラスみんなが店員を呼び、部屋の前でさっきの怪異について説明する。

店員は「今までこの部屋でそんな現象がおこったことはない」と青ざめて他の部屋を使うかどうか聞いてきたが、もちろん満場一致で否決され、そのまま帰宅することになった。

今まで冷静でいられたが、そこからはとても落ちつけなかった。バス停や駅で沙也やクラスメイトと別れ、ついには奈緒美ちゃん

と二人きりの帰り道になってしまったからだ。

その頃には「戸和さんがいつていたのは奈緒美ちゃんの性格じゃなく、彼女に憑いてる変なものかもしれない」と思い始めていたの  
で、何とも背中がぞわぞわする。

けれどクラスメイト相手にだんまりを決めこむわけにもいかず、  
口を開いた。

「今日なんか怖かったね。お被いとか行ったほうがいいかもね」  
「は？」

「怖かったね」

奈緒美ちゃんは嘲笑するように口元を歪めた。

「あんなのだれかのイタズラに決まってんじゃない」

保月さんって騙されやすそー、と。

「……イタズラって、どうやって？」

「知らない」

それきり口を閉ざす。

まあ信じていないなら放っておこうと、私も黙っていた。

しばらくして電車を乗り換えたあと、ホームで「じゃあね」と簡  
単な挨拶をして別れ、ほっと一息をつく。

同時に肩をたたかれて、心臓が飛びだしそうになった。

「あの子、友達？」

バイト帰りだろうか、高橋さんが背後に立っていた。

まさか家庭教師の授業以外で出会うとは思ひもなかったが、考  
えてみれば彼は自宅から通勤しているのだから、そう遠くない場所  
に住んでいるだろうし、地元を歩けば遭遇する確率はそれなりにあ  
るのだ。

「く、クラスメイト」

「ふうん。仲いいの？」

「いや、全然。クラスで遊びに行ったら帰り道が一緒になって……」  
高橋さんが笑った。

「ならいい。なにやらかしたか知らないけど、あの子やバイもんが

憑いてる。あんま関わるなよ」

戸和さんと同じものを見たんだろうか。

「なにが見えたの？」

「え？ 聞いちゃう？ それ聞いちゃう？」

高橋さんはたまに変なテンションになる。

「なんだから……人じゃないかも」

ずっと片手で駅名が書かれた看板を指す。

天井からつられているそれはだいたい2、3メートルくらいの高さだろうか。

「背があれくらいで、全身まっ黒で、首と手足が異様に細長くてボキボキしてんの。ヤバそうだったから顔は見てない。それがこんなかgando、三角座りするみたいにして電車のりこんで、あの子についてった」

それと関係があるかどうかはわからないけれど、あのカラオケ屋の前で鳥の死骸が大量に見えたり、奈緒美ちゃんが学校の階段から落ちて腕を骨折したりした。

彼女とは違う高校へ行ったので、その後どうなったかは知らない。

小学生のころ。

夏休みに祖母の家へ遊びに行き、近所の川で泳いでいたら、父がつけもの石くらいの大きさの石を持ってきた。

全体的に白っぽくてごつごつした横長の石で、そんなに重くはない。

「見てみる、これ水晶だぞ！」

いわれて見てみると確かに石の一部に楕円形のくぼみがあり、その中にはガラスにも似た半透明の石ができています。

日本の川で水晶ができるのかは知らないが、確かにそれは限りなく水晶に似ていた。

父はウキウキとそれをもって帰り、ご満悦だった。

その翌日。

親戚の結婚式に家族で出席したのだが、父と姉が食中毒で倒れた。ちなみに同じ料理を食べた私と母、祖母など他の出席者はなんともなかった。

二人とも点滴をして二、三日くらいで回復したのだが、そのあと姉が川で溺れて岩にひっかかり、足から流血。父も夏風邪を引いて高熱を出した。

それなりに心配してはいたのだが、二人の看病は母と祖母がしているし、たまに様子を見るくらいしかやることもないのでヒマをもてあまし、私はフォーティーワンゲームで遊んだり従兄弟と宿題を分担したりしていた。

さらに二日ほど経った夜、部屋でたまたま荷物を整理している時にあの石を見つけた。

うちに持つて帰るつもりらしく、バケツの中に入れられている。私もこの石を気に入っていたので、なんの気なしにとり出してながめた。

これまでも川や移動中の車内などでうつとりとながめており、その度に綺麗な水晶だと思っていたのだが……どうしてか、その時はちつとも綺麗に見えなかった。

まるで石に寄生虫の卵がくっついていてみたいに気持ち悪い。

こんな不気味な色をしていただろうか？ まっ白で透明がかつているのは変わらないが、なんだかガラスに入ったクモの巣みたいにも思える。

これをまた車に載せて家まで持つて帰るなんて冗談じゃないと、こっそり近くの空き地に捨ててしまった。

まっくらで灯り一つない夜道を引き返す間、気のせいか草むらに置いてきたあの石に見られているような、あるいは石が追いかけてくるような妄想に襲われて、家まで走って帰った。

関係があるかは定かでないが、次の日ようやく父の熱が引き、だ

いぶ調子も良くなったので自宅に帰ることになった。

本当は念のためもう一日滞在したいところだが、仕事の都合でこれ以上いられないらしい。

荷物を車につめこむ最中、バケツからあの石が消えたことに気がついたはずなのに、父はなにもいわなかった。

順調に成績が上がって親に喜ばれたり、テストでケアレスミスをしてしごかれたりしていた9月。

いつも通り私の部屋に入り、授業をはじめるまえに高橋さんがこそそとぬいぐるみを取り出した。

抱き枕にできそうな感じのでつかいやつで、ふわふわしている。

別に誕生日でもなんでもないのだが、昨日たまたまゲーセンでわたのくれるそうだ。

「ありがとう」

かわいいやつだし嬉しいけど、ちょっと背のびしたい年ごろの中学生としては子供あつかいは面白くない。

複雑な心境でぬいぐるみをいじっていると、高橋さんが意外そうに聞いた。

「趣味じゃなかった？」

「趣味だけどね」

ぬいぐるみを本棚の上にかざってみるが、少々バランスが悪い。

これは枕にしよう。

ベッドの上にぼんと置くと、高橋さんが爽やかに笑った。

「じゃあ今日は人形の怖い話な！」

「やめて」

まさかコレいわくつきじゃないだろうなと身構えたが、「冗談だったらしい。

代わりにチケットをわたされた。



「うちの大学で学園祭やるんだけど、良かったら来る？」

大学の学園祭は思っていたより派手で盛大なものだった。

客で賑わい、花火大会なみの人混みができている。

入り口でゲストシールとパンフレットをもらい、ぶらぶらまちなかせ場所へ行くと、高橋さんとその友達らしい青年が三人いた。

しまった、友達誘ってくるんだった。

後悔しつつ声をかけると、案の定四人ともこちらにやってきた。

「けっこーこの本格的だろ？」

と高橋さん。

他三人もほぼ同時に声をかけてくる。

「ちっちゃいなー。うちの妹より可愛いわ」

「これが三年くらいしたらJKになるのか」

「暑かったろ。ジュース券をあげよう」

元々人見知りするタチだが、でっかい大人四人に囲まれると威圧感というか迫力があり、逃げ出したくなる。

高橋さんと三人のうち一人はわりと女顔というか、中性的な外見だからまだ平気だけれど、他二人はけっこゴツイので特に緊張する。

「カテキョの生徒なんだっけ。こいつ、教え上手だろ。1聞いたなら10も50も教えるからな。話長いんだ」

「わかりやすく教えてもらって助かってます。優しいし」

答えながら背中を冷や汗が伝う。

「正直に”あの人面倒くさい”っていつていいよ」

三人がどつと笑う。

「おまえらもう助けてやんねー」

高橋さんが笑って私の背を押す。

「じゃあ、後でな」

ずっと五人で行動するのかとヒヤヒヤしたが、そうではないとわかって内心胸をなで下ろした。

三人とはそこで別れ、たこ焼きをおごってもらったりミニゲーム

に参加したり、すっかり忘れていた例の幽霊がよく出る教室に連れて行かれたりと学園祭を満喫した。更に怖いというトイレは全力で拒否した。

和風喫茶で一息ついたとき、高橋さんがほほえんだ。

「次、お化け屋敷行こう」

## 学園祭

行ったことがないので興味はある。

たぶん暗い部屋にいくつかハリボテが置いてあって、物陰にお化け役の人がかくれているとか、そんな感じだろう。

「うん、行く！」

貞子みたいな格好してても、人間なんか怖くない。

と思ったが全然そんなことはなかった。

お化け屋敷が本格的すぎたのだ。

わくわくと入り口の黒いすだれをくぐって、足が固まる。

第一の部屋は、本物そっくりのお札で埋めつくされていた。

暗い室内が赤いライトで一部だけ照らされていて、よく見ると心靈写真まではつてある。マネキンの首や人形など不気味な小道具が転々と置かれ、BGMはお経で、気味の悪いDVDがえんえんと映されている。

進路の先にはお化け役の人間がすすり泣いてうずくまっているのだが、それが超怖い。なぜって、アレが人間なことはわかりきっているが、先へ進んだら確実に追いかけてくるのもわかるから怖いのだ。しかもその道がやたら細く、天井からも邪魔な障害物がぶら下がっている。二人連れの客の場合、後ろを歩く人間はアレに捕まるに違いない。

「私先行く」

「いいよ」

予想通りアレが奇声を上げながら猛ダッシュして追いかけてくる。私もダッシュで逃げたが、高橋さんはお化けに捕まりながら「たしか何回か同じ講義受けたことあるよね」などと楽しそうに話しかけていた。その後も網をくぐったとたん不気味な音声が流れる廊下とか、笑う人形など様々な難所をぬけ、5分後には足がガクガクし、大変すずしくなっていた。

お化け屋敷なんか二度と行かない。

そんな決意を新たにして先へ進むと、最後の部屋にあったのはエレベーターだった。

特にこれといった装飾もなく、脅かす人もいない。

ただずつとドアが開かれている。

これに乗って他の階へ移動してくださいという事だろうか。

「これに乗るのかな？」

高橋さんは「さあ？」というだけで、進む気配がない。

先に見えている出口っぽい所へ行くかエレベーターで移動するか、私が決めていいようだ。

軽く前のめりになってエレベーターの中をうかがうが、なんの変哲もない。それでもなにか仕掛けがありそうで怖くて、結局入らず出口へ向かった。

が、出る前に高橋さんに呼び止められる。

「ひな、もう一度エレベーター見てみな」

ふり返ってギョツとした。

いつの間にか、エレベーターの扉が閉じている。

高橋さんはずっと真後ろにいたので、エレベーターのスイッチを押したりはしていない。

しかもその扉には『学園祭中使用禁止。このエレベーターを使用しないでください』と書かれた紙がはられていた。

「変なしかけだね」

「これに繋がってるエレベーターは他の階でも使用禁止になってるんだ。汚いエレベーターを見られないようにするためと、あとチケツト持っていない客がここからお化け屋敷に入らないために。……なのはどうしてドアが開いてたと思う？」

嫌な予感。

「演出のためじゃないの？」

目の前でエレベーターのドアが開いた。  
だれも乗っていない。

「じゃあ、今一人でドアが開いたのはどうしてでしょう?」

エレベーターをずっと開けっぱなしにしておくことは簡単にできても、自動的に開けたり閉めたりするようになんて、まして遠隔操作なんてこの古いエレベーターでできるとは思えない。

「……まさか」

「そ。このエレベーター、でるって評判なんだ」

パキン、と天井が大きくきしむ。

私は走るようにしてお化け屋敷を出た。

出口でお清めの塩を受け取って、周囲に人がいることに安心していたら、高橋さんがニヤニヤしながらやってきた。

「大丈夫、あんなの全然ヤバくないから」

いわく、その筋でちよつと有名な人がこの講師にいて、その人が監修したお化け屋敷なのもあって本物が3、4匹まぎれこんでいたという。だがどれも危険なものではないので大丈夫だ、と。

「心霊スポット嫌いだっていったじゃん……」

「なんで? 怪談は好きだろ? 慣れれば楽しいって」

「楽しくないっ」

もちろん、この大学には二度と行かなかった。

一時期、学校で”失神ごっこ”という遊びが流行った。

一人の鼻と口をふさいで心臓の辺りを10〜20回強打するという悪趣味なものだ。たいていはなにもないが、ごく稀に失神する者がいるのが面白いらしい。

私も友達もこの手の遊びは嫌いなので話題にもしなかったのだが、運悪くそうということが好きな連中に目をつけられ、一人で行動しているときに空き教室に連れこまれ、二人がかりでやられてしまった。

「……っ」

床に座りこんだまま深呼吸する私の頭上で笑い声が響く。

「失神しないね」

「力がたりなかったんじゃない？」

「あたし握力あるんだけどなあ」

「さんねーん。チャイム鳴ったし、いこ」

ばたばたと楽しげに去っていく。

他人をオモチャとしか見ていない価値観が信じられなくて、シヨツクでしばらく呆然としてしまった。

幸い二人とも女子だったので力が弱く、ちょっと息苦しいだけですんだのでだれにも言わなかったが、なぜか高橋さんにはバレてしまった。

「なんか危ない事なかった？」

私の部屋で問題の解説をしている最中、なんの前触れもなくいきなりこれである。

靈感もち怖いとちょっと思った。

「してないよー」

正確にはされたわけだし。

いじめられたなんて恥ずかしくていえない。命に関わるような事ならいう決心もつくが、あれ以来たまに問題児二人が嫌味をいつてくるくらいで、特に害もない。放っておけばそのうち声をかけてくる事もなくなるだろうと思われた。

「ならいいけど」

高橋さんは心なししか私の背後を見つめて、つぶやいた。

それから一週間くらいしたところ。

私に失神ごっこをやらかした二人が一ヶ月の停学処分になった。

うちの学校は屋上が施設されているが、屋上の扉までの階段は普通に登れるし、そこまでは滅多に人が来ない。

そこに他のクラスの生徒を連れこんでまた強制失神ごっこを行ったところ、よろけたその子が階段から落ち、鎖骨が折れたらしい。

そこまで被害が出たのは一人だけだが、他にも被害者がいるのでけっこう内申に響くのではとクラスで噂になっていた。

私がすぐ先生にチクっておけば彼女は被害に遭わなかったかもしれない。

「……」

少し反省して「実は私も失神ごっこやられました」と担任にチクったところ、通りすがりに立ち聞きした沙也が「なんでいかなかったの!? PTAにもチクってあいつら退学に追いこんでやれ!」と怒ってくれた。

先生は、

「いや、退学は……人生変わっちゃうから」  
とかモゴモゴいつていた。

次の家庭教師の日、

「よかったな」

家に来るなり高橋さんがそういつて、授業をはじめた。

まったく説明してないのに、全部見透かされていたような気がする。

ある晩、夜中の3時ごろに崖から落ちたように全身がビクツとなつて目が覚めた。

最近部活でいそがしいから疲れてるんだ、と気にしなかったけれど、次の夜は気持ち悪い夢を見て、その直後に同じようにしておきた。

内容はすぐ忘れてしまったが、ハエが視界いっぱいに広がっていたような気がする。

次の日もまた3時ごろに飛びおきた。

夢はまた忘れてしまったが、今度は拷問されたようなひどい恐怖感に襲われ、目が覚めてしばらくは肩が震え、あまりに怖かったのでそれからずっと電気をつけておきていた。

次の夜は泣きながら飛びおきて、自分の顔が涙でぐしょぐしょな

のが”漫画みたいだ”と思った。

次は、夢の中でずっと悲鳴を上げていた。それでいて妙に息苦しくて、叫びながら口をパクパクしていたら現実で少し口が開いて目が覚めた。

そんな状態がだいたい二週間近く続いて、私は高橋さんに相談した。

「もつと早くいえばいいのに。俺はてっきりテスト前だから無理なつめこみ勉強してんのかと」

宿題を広げた机を前に腰かけ、彼が心配そうな視線を投げてる。

「テスト前日なら徹夜するけど、一週間前から徹夜なんてしないよ」

「……テスト前でも徹夜なんかしないといって欲しかったんだけど。俺が出した課題を毎日きちんとこなして学校の授業を真面目に受けて予習復習宿題さえやっておけばテスト勉強なんてする必要はないんだからな？ テストつてのは今までの総復習にすぎないんだから、もつとつきつめれば必要な公式覚えて応用解けるようになれば」

長いお説教が終わったあと、高橋さんは目を細めた。

「なんか罰当たりなことしなかったか？」

予想もしなかった言葉だ。

「え……まったく心当たりないけど。神社もお寺もお正月くらいしか行かないし」

高橋さんがしかめるようにして目をこらす。

目が悪いのだが、ギリギリ眼鏡をかけなくてもいいレベルなので裸眼でがんばっているそうだ。

「でもこれ神様っぽいぞ。すげー見えにくいしその辺の霊じゃない」

「神様！？ もしかして、うちの神棚にもお正月くらいしかお参りしないから？」

我が家にはささやかな神棚があるのだが、手入れは母が毎日していて、私はまったく手をつけていない。

「違う。でも神様つてのは神社でぼろつと悪口いっただけでも祟るからな。なんか、そういう些細な事したんだ」



「神様の悪口なんて……あ」

「いったのか」

高橋さんがニヤリとした。

「あー……いや、悪口じゃないけど、心当たりが……」  
非常にいいにくい。

が、相談しておいて打ち明けないわけにもいかず、白状した。

当時私は友達数人と交換日記のような要領でノートに漫画を描いていたのだが、適当に考えたキャラの名前が日本神話にでくるとある神様の名前と被っていたのだ。友達にそう教えてもらったが、かえって箔がついて良いかもそのまま使っていた。基本的にカツコイイキャラとして扱ってはいたが、ノリツツコミの描写でそのキャラを「ウザイ」と描いたりもした。

高橋さんはしばらくお腹を抱えて大爆笑していた。

「なんだコレ、交換日記は聞いたことあるけど、今の子って交換で漫画描いたりすんの!? コレか、ひなが描いたのコレか!？」

某幼女向けアニメが好きな大学生にそこまで笑われるすじあいはないと思う。

散々からかわれた後、しびれを切らして私はたずねた。

「……あの、それでコレ、どうすればいいの？」

「ん」

ひょいと消しゴムをわたされる。

「これで神様の名前書いたところ全部消して当たり障りない名前に書き換えな。あとは寝る前にゴメンナサイしとけば十分」

「神社に持って行ったりしなくていいの？」

「うん。ヘーキヘーキ」

本当に、たったそれだけで悪夢を見なくなった。

## 宝石商の育て方

少し肌寒い季節になったころ。

「宝石商の育て方って知ってる？」

家庭教師の授業中、高橋さんが妙なことをいい出した。

「知らない」

「商人の中でも特に宝石を専門にあつかうやつを宝石商っていうのはわかるよな？ 宝石商は本物と偽物の宝石の見分けがつかないやいけない。だから商人が後継者を育てるときは、小さいころから本物の宝石だけ見せて育てるんだ。そうして大きくなると、偽物を見たときに”これは違う”と一目でわかるようになる」

「へー、面白い」

偽物を見分けるにはまず本物を知れ。

これはどの業界にもいえそうだ。

「そうそう、今度の土日空いてる？」

「空いてるけど、なにすんの？」

高橋さんがにっこり笑う。

そういう顔をされると某男性アイドルによく似ていて、なんでもいうことを聞いてしまいそうになる。

「知り合いと車で出かけるんだけど、ひなも来る？」

が、このまえ痛い目にあっただばかりだ。

「やめとく。心霊スポットだったら嫌だし」

「あーたーりー。じゃあ土曜日の昼な。昼間なら大丈夫だろ」

「嫌だっつってんじゃん！ 知り合いさんと楽しんでおいでよ」

「俺、そいつ嫌いなんだよね。二人つきりとかありえねー。なんの拷問だよ」

高橋さんから笑顔がひっこんでちょっと驚いたが、流されるわけにもいかない。

「なんで嫌いな人と出かけるの。断るか、他の人誘えばいいじゃん。」

高橋さん友達多そうだし」

「ひながいい。このまえぶるぶるしてて面白かったし」

こっちは笑い事じゃなかったというのに。

高橋さんはからかうように笑う。

「いつも助けてあげてるだろ？」

土曜日の昼すぎ。

お守りやパワーストーンをカバンに忍ばせて渋々まっていると、知らない車が迎えに来た。

いつも高橋さんは車でうちに来るので、てっきり彼の車で行くのかと思っていたが違うらしい。

運転手は高橋さんの知人遠藤さん、助手席に二人と同じ大学の山田さん、後部座席に高橋さんと私が乗った。遠藤さんはチャラくて筋肉質だけどモテそうな感じの男性で、山田さんは”美人秘書”というイメージがぴったり似合いそうなスタイル抜群のセクシー美女だった。

「四人で行くことになったんだね」

こっそり聞くと、

「俺も聞いてなかった」

俺と二人でなんておかしいと思ったけど、と高橋さん。

どうやら遠藤さんはオカルト好きの山田さんをくどくのが目的のようだが、万が一怖い目に遭ったら嫌なので高橋さんを強引に呼んだらしい。

「それで、今日はどこ行くの？」

「トンネル」

心霊特集などでよく聞く場所だ。

「必ず心霊写真が撮れるらしいよ」

今までに撮ったやつ見せてあげようか、と山田さん。

「山田さん俺とツーショットで心靈写真とろ山田さん」

家宝にするから、と遠藤さん。

「いいねー」

メンバーの中では高橋さんだけがそこに行った事があるらしく、たまに遠藤さんが高橋さんに道を聞いたり、高橋さんが指した行き先の地図を見て山田さんがナビしたりして、だいたい一時間後くらいに到着した。

山道に繋がる古びたトンネルがあり、左右には木が生い茂っていて、少し手前の歩道に緑の公衆電話ボックスが設置されている。車の交通量はかなり少ないようで昼間なのに薄暗く、カビ臭い雰囲気。の場所だ。

「それじゃ、歩いて中まで行ってみつか」

高橋さんがいって、車を降りる。

一人だけ車に残っていようかとも考えたが、昼間だし思ったより怖くないので私も続いた。

直後、

「痛っ」

遠藤さんが肩を押さえて顔をしかめる。

「大丈夫ですか？」

「ああ、俺つかれやすいからさ。こういう所くるともう、入る前から肩重くなったり頭痛くなったりするんだ」

「……そんな体質なのによくきましたね」

ちよつと呆れていると、遠藤さんが笑った。

「だって、面白いじゃん」

トンネル内では先頭が遠藤さんと山田さん、その後ろを私、そのまた後ろに少し遅れて高橋さんという順番に歩いた。

テレビでたまに見るくらいであまり知らないのだが、もしかして今は使われていないトンネルなんだろうか。

トンネルの中には灯りが一切なく、まっくらというより真っ黒だ。かすかに見える出口からの光だけがうつすら不気味にさしこみ、

湧き水なのか雨水が残っていたのかわからない、得体のしれない液体が天井の一部からしたたっている。そのせいか空気も少しひんやりしている。どぶのような匂いが漂っていて、軽く鼻を押さえた。「怖い?」

追いついて隣にならんだ高橋さんが問う。

「意外と平気。昼間だとあんま怖くないね」

以前友達と行ったカラオケの事を思い出しながら、「周囲に人がいれば結構大丈夫かも」なんて考えていた。

「じゃ、また今度昼間に心霊スポット行くか」

「絶対イヤ」

それとこれとは別である。

不意に前方から二人分の悲鳴が響いた。

遠藤さんがなにかを指さして、山田さんはその背にしがみついている。

「どうした?」

高橋さんがゆっくり歩み寄ると、

「そこに変な黒い影が!」

確かに黒い影がいた。

らんらんと緑に光る二つの目で警戒するようにこちらをにらみ、いつでも逃げ出せるように身構えている。

なんていうか……ネコだ。

「ネコだよ」

高橋さんが近づくと、怖がって出口へ走って逃げていく。

しっぱをボワボワにふくらませた黒ネコで、とても可愛かった。

「え、でも今確かにうめき声したよな。男の野太い声で」

「私には聞こえなかったけど、もう出よ。怖い」

二人がかけ足でトンネルを出る。

私たちも後を追うと、車の前でまた悲鳴が上がっていた。

窓、ボンネット、ミラーなど、車の大部分に人の手形がつきまわっていたのだ。少しなら気のせいですむが、こんなにおびたらしい

量だとなにもいえない。

「すげー！ やっぱ本物だ トンネル」

引きつった顔で写メを撮る遠藤さん。

トンネル内で撮った写メも心靈写真だったそうで、見せてもらったのだが、そっちの方はただの光の屈折にしか見えなかった。

「さすがにコレは光の加減じゃないですか？」

「ここ見てみ。顔が映ってるじゃん」

いわれてみれば、ギリギリそう見えなくもないような。

コメントに困って高橋さんに渡すと、チラッと見ただけで遠藤さんへ返した。

「高橋、なんか俺頭と肩がすげー寒いんだけど大丈夫かな？」

「高橋さんってそういうの詳しい人なの？」

遠藤さんの腕をつかんだまま山田さんが問う。

わざわざこんな所に連れて来なくても両想いなのでは。

「ああ、こいつちょっと大学で有名なんだ。親戚が神社やってるんだって。山田さんも何かあったらいいよ。俺にいつてもいいけど」

「へー、カッコイー。ひなたちゃんも靈感あるの？」

「私はただのつきそいなので、全然」

苦笑すると、高橋さんが皮肉っぽく口元を歪めた。

「いいふらさないでね。あと俺、金とるから」

何回か相談した気がするが、私の相談料はカテキョ代に含まれているんだろうか。単に遠藤さんに関わりたくないから、牽制としていっただけのような気がする。

その後はファミレスに寄って帰宅した。

帰り道私は眠り、高橋さんはPSPで遊んでいた。

遠藤さんは「トンネルの話をしていたら急にコンビニ袋がフロントガラスにぶつかってきた！」と騒いでいた。

後日、家庭教師の時間に高橋さんがたずねた。

「この前のトンネルどーだった？」

「んー、昼間行ったからだと思うけど、テレビとかで有名なわりにあんま怖くなかった。でも遠藤さんは大変そうだったね」

「ああ、あれから三日間”微熱がでた”って大学休んでる」

「へー。靈感ある人は大変だね」

高橋さんがじとりとこちらを見た。

「……なーんで気づかないかな」

「え？」

物いいたげな視線を送られて考えてみるが、なんのことだかわからない。

やがて、盛大なため息とともに頭をなでられた。

「まあ、ひなはいいいよ。まだ中坊だし、アレに比べりや現実的だ。

でも、他人の話をうのみにしやすいのはちょっと問題だからそこは気をつけような」

「意味がわからないんだけど」

「あのな、この前行ったトンネルは心霊スポットなんかじゃない。ふつつーのトンネルなんだ。霊なんかいなかった」

耳を疑った。

「え！？ でも、トンネルは本当にヤバいってよく聞くよ？ 怪談好きじゃない人も知ってるくらいだし」

「この前行ったのは トンネルの何個か手前にあった別のトンネル。こういう反応するか見てみたくて、わざと違う場所に誘導したんだ」

おまえだまされやすいぞ、と高橋さん。

「でも、遠藤さんは肩が痛くなったり変な声聞いたりしたって、なにか色々いつてたよ？ それにさっき熱がでて学校休んでるって」  
「全部ただの思いこみ。あいつはなんでもかんでも心霊現象に結びつけすぎなんだよ。そりゃ肩に霊しょって肩が痛くなるやつもいる

よ。でもこの前のはただの肩こり。だいたい、普段からちよつと転んだくらいで幽霊幽霊いつてるやつなんだ」

絶句してしまった。

靈感がある人を何人か知っているの、彼もきつと本当にそうなんだろうと思っていた。

「じゃ、じゃあ車についてた手形は？ 私も見たけど、来たときはあそこまでついてなかったよ？」

不機嫌そうに眉根を寄せていた彼がようやく笑った。

「手形なんてさ、だれにでもつけられると思わないか？」

「まさか……」

「皆が先にトンネル入ったすきにパパーッと。あの馬鹿、自分の車汚されて大喜びで写メ撮ってやんの。笑えるだろ？」

そつえばあの時、高橋さんは少し遅れて入ってきたっけ。

「笑えないよ」

「いいじゃん喜んでたし」

それより、と高橋さん。

「宝石商の話覚えてるか？」

「覚えてるけど」

「もし、本物と偽物の区別がつかない宝石商がいたらどうなると思う？」

「店がつぶれるか、クビじゃない？」

現実にはけっこう偽ブランドのバッグや時計が出回っているらしいけど。

「じゃあ宝石商じゃなくて、霊能者だったら？」

「え？」

「本物と偽物の区別がつかない霊能者」

「えーと……やっぱり売れなかったり、倒産したり」

違う違う、と高橋さんが笑う。

「ただのキガイになるんだ」



## 車おばさん

その日、雨が降っていたせいか髪がうまくまとまらなくて、私は少し家を出るのが遅れた。

けれど走るほどでもないし、ギリギリ遅刻にならないくらいの時間だ。

だからのんびり通学路を歩いていたら、目の前に車が停まって驚いた。

「遅刻するよ！ 乗って行きなさい」

お母さんくらいの年ごろの、普通のおばさんだ。

知らない顔だけど、近所の人だろうか？

別に急いでないし、少し人見知りの気があるので「どう断れば角が立たないか」と考えながらおばさんを見返して、気づいた。

後部座席に同じ学校の生徒が乗っているなら、声をかけられるのもわかる。自分の子供を送るついでに、というなら。でも車にはおばさん一人だけだ。親切すぎる、と考えるのは勘ぐり過ぎだろうか。「歩いていけるんで大丈夫です」

なんだかうすら寒くて、それだけいつて先を急いだ。

とても親切なだけのおばさんだったらごめんなさい、と思ったものの、学校についてから「断って良かった」と息をついた。

そのおばさんは学校で有名な人だった。

うちの学校の生徒のお母さんで、たまに遅刻しそうな生徒を見かけると送ってくれる優しい人……だったらしいのだが、二年前にその生徒が亡くなってからおかしくなってしまった。

毎朝のように通学路に出没して、だれかれかまわず生徒を車に乗せようとする。

乗っても危害を加えられるわけではないのだが、その亡くなった生徒の名前で呼ばれ、自分の子供のように話しかけられるので気味が悪い。

同じクラスにも5、6人、声をかけられた子がいるそうだ。

……なんともいえない。

それから何度かそのおばさんに声をかけられたけれど、私は毎回断った。

そうして、いつの間にかその人を見なくなったころ。

こんな噂を聞いた。

一ヶ月くらいまえ、あのおばさんが交差点で対向車と衝突して亡くなった。

なのに、まだあのおばさんが現れる。

けれど、現れるのはおばさんではなくおじさんで、時間帯も朝ではなく夕方なので別人だという噂もある。

共通点は車に乗せようとしてくることで、おじさんの車に乗ると帰ってこれないそうだ。

「っていう話が最近学校で流行ってるんだけど、知ってる？」

家庭教師の時に話してみたら、高橋さんが顔を引きつらせた。

「知らない。つかそれふつーに誘拐犯だろ。乗るなよ？ 声かけられても絶対に乗るなよ？」

「の、乗らないよ。おばさんでもちよつと怖いのにおじさんなんて怪しすぎるし」

「おばさんでも乗るな！ 防犯ブザーもって友達と一緒に帰れよ。

その話、ちゃんと家の人にしたか？」

「あ、うん。学校で”不審者に注意”ってプリントもらったから」  
怪談のつもりでいったのに真面目に反応されて申し訳なくなり、

その話はそれで打ち切った。

それから一週間くらいあと。

委員会の集まりで遅くなってしまい、暗い空の下を歩いていた。  
友達と一緒にだったけれど、家が離れているので途中からは一人に

なつてしまった。

どうして昼と夜ではこんなに雰囲気が違うんだろう。

まっ黒な夜道がときおり街灯で黄色く照らされるさまは、なかなかコントラストが効いて美しいと思う。

古くてうす汚れた道路や蛍光灯も退廃的で、異世界に迷いこんだような錯覚をおこす。

アリスみたいなメルヘンじゃなくて、ダンボールの中に閉じ込められたネズミのごとく閉鎖的で、狂気の匂いがする異世界だ。

「暗いのにな人で歩いてたら危ないよ。送ってあげるから乗りなさい」

いきなり声をかけられてつい、体が硬直する。

最初からそうだったのか、気がつかなかったのかはわからないが、いつの間にか横に車が停まっていた。

噂のおじさんだ。

見るからに変質者風ということもなく、どこにでもいそうな感じの風体で、親切そうにほえんでいる。

「家すぐそこなんで、大丈夫です」

本当はまだちよつと遠いけど。

先を急ごうとすると、車のドアが開閉される音。

「子供が遠慮するんじゃないよ」

おじさんが車を降りてこちらに迫っていた。

うそ。おっかけてくるなんて、聞いてない。

今こそ防犯ブザーの出番？ でも、実はただの近所のおじさんだったりしたら。学校の先生のだれかという可能性もある。

「いえ、本当にいいです！」

「いいから、いいから」

走って逃げようとしたら、先回りして通せんぼされてしまった。

40か50くらいのおじさんが子供みたいに道端で両手を広げて迫ってくる。それがなんとも気持ち悪くて、もういいやブザー鳴らしちゃえとカバンに手をのばした。が、カバンの底でまぎれてしま

っているようでなかなか見つからない。必死でカバンをかき回していたら、うめき声と一緒に鈍い音がした。

おじさんが頭を押さえ、地面にひざをついている。それを高橋さんがスパーンと平手打ちして上半身を足で踏みつけた。

「よし、落ちた」

「高橋さん!？」

どうしてここに。ああでもそれよりおじさんが気絶してしまった。

「きゅ、救急車? それとも警察!？」

ケータイを手におろおろしていたら、高橋さんが道端に転がっていた買い物袋をひろって手招きした。

「ほつといていいよ。行こう。送ってくから」

帰り道、歩きながら聞いたところ。

不審者の話をしていたから少し気になって、あれからこつち方面を通りがかった時は通学路の様子を見るようにしてくれていたらしい。不審者を通報できればもうけ、くらいの気持ちだったそうだが、私がいてとても驚いたとか。

「ありがとう。でも、あの人ほつといて良かったの?」

「あのオッサンつかれてただけだから」

「疲れてた?」

高橋さんが笑った。

「学校で不審者に会ったって子に聞いてみな。たぶん、最初のおばさん以外みんな別人だ」

この通学路にはあのおばさんの霊が漂っている。

朝は大丈夫だが、暗くなってから霊感の強い人が子供のことを考えながらここを通ったりすると、おばさんの霊に同調してあのような行動をとってしまう。憑かれた本人はなにも覚えていないので、あの人を通報しても仕方ない。

そう彼は語った。

「じゃあ、あのおばさんこれからずっとアレを続けるのかな」

つぶやくと、高橋さんが少し考えるような素振りをする。

「怖い？」

「……怖い」

彼が来なかったら、いったいどうなっていたんだろう。

帰ってこれなくなる、なんてのはただの噂だし、あのお婆さんの霊ならたぶん自分の子供みたいに話しかけて送ってくれるだけだとは思うが、やっぱりゾツとする。

「仕方ないな」

高橋さんが嬉しそうに笑った。

「じゃ、タケシ君の家ってどこかわかる？」

「……亡くなった生徒の名前、教えたっけ？」

男子なことも教えてなかったはず。

問うと、彼は自分の肩をさして答えた。

「ああ、このお婆ちゃんずっと呼び続けてるから」

それから少し歩いた所にあるタケシ君の家の前へ行き、

「これでもうあのお婆ちゃんの霊は出ないよ。でも普通の不審者はまだいるかもしれないから、これからはこんな夜遅くに一人で歩くなよ」

と釘を刺された。

中学生にだって部活とか委員会とか、いろいろ事情があるのだから、それはともかく。

お婆さんの霊は通学路をウロウロしていたが、息子の霊はずっと家にいて行き違いになっていたらしい。

それでお婆さんを家の前まで連れてきたら息子の霊が出てきて、二人そろって成仏していったと。

けれど翌日。

学校のホームルームで新たなお知らせを聞いて、私は顔を引きつらせた。

「ゆうべ通学路で40代後半の男の人が暴行を受けて気絶していたそうです。男の人は暴行を受けた前後の記憶がなく、通り魔の可能性が高いです。大人でも襲われるんですから、みなさんも十分気を

つけてくださいね。遅くまで学校に残る人は友達と一緒に帰るか、お家の人に迎えに来てもらってください」

先生の言葉に他の生徒が「こわーい」などと口々にいう。真相はともいえなかった。

休日の昼間。

家でごろごろとテレビを観ていたら、

「高橋さんってたまにすごいクマ作ってるけど、なにか夜遊びでもしてるの？」

母にそんな事をいわれて驚いた。

「え？ クマなんかあったっけ」

母があんぐりと口を開ける。

「信じられない……あんた、毎週2回も会ってるくせに」

「そんなしげしげ見ないからなあ」

綺麗な顔だとは思っけれど。

人見知りのせいか、私は人の目を見て話すのが苦手だ。目が合ったままだと緊張してしまつてすぐそらす。あるいは、相手が目をそらしている間にちらつと顔を見る。この悪癖は学校の教師や沙也にさんざん注意されているのでさすがに自分でもまずいと思い、最近ようやく会話中に何回か目を合わせられるようになってきたところだ。

「バイトかけ持ちしてるとか、大学がいそがしいんじゃない？」

「ああ、それはありそう」

高橋さんは髪を染めていないし、口を開かなければ真面目そうに見える。性格も器用というか、世渡り上手なタイプだ。

そのおかげもあって、母はそれだけで納得したようだった。

今度クマがあるか見てみよう、と思っていたのに、いつの間にかすっかり忘れて冬を迎えた。

高橋さんが二週間も家庭教師を休んだ。

インフルエンザが長引いているらしい。

家庭教師の会社から代理の教師を提案されたが、「じきに治るだろうし、まだ受験までだいぶ時間もあるので」と丁重に辞退した。彼以外の家庭教師なんて考えられない。

部屋で一人勉強していたら寂しくなって、メールを送ってみた。

「大丈夫？ お見舞い行こうか？」

少し前にインフルエンザの予防接種を受けたし、たぶんうつらないだろう。

返信メールには住所と最寄駅だけが書かれていた。

来いということだろうか。

「じゃあ、ちょうど明日休みだから明日の昼ごろ行くよ。なにか欲しいものある？」

「びわゼリー」

と珍しく短い返信があった。

## クマ

そこは高そうなマンションだった。

駅からも近くて清潔そうで、「将来ひとり暮らしするならこういう所がいいな」なんて考えながら玄関に近づくと、ドブと排泄物が混ざったような異臭が鼻をついた。

「うっ？」

生ゴミか動物の死体でもあるのかと思った。

でも、それらしい物は見当たらない。

今たまたまゴミがないだけで、普段は玄関をゴミ捨て場にしていいのかと疑いたくなる匂いだった。

綺麗な所なのにもつたいない。

オートロックを解除してもらってガラス張りの玄関に入り、エレベーターへのりこむ。

新しくはないが清潔なその密室で10階のボタンを押す直前、無意識に背後をふり返った。だれかが後ろにいたと思ったのだが、別にだれものっていない。影で黒くそまったガラスが鏡と化し、私の後ろ姿だけが映っている。

気を取り直してボタンを押した。

部屋の前でインターホンを鳴らすと、フラフラの高橋さんが出てきた。

「よ。いらつしやい」

額に冷えピタをはっているが、それがなくても一目で病人だとわかる。

「……高橋さん、病院行つた？ 顔が青色とおりこして緑がかってキモイんだけど」

「キモイ！？ ……三日寝てないからな」

シヨックを受けたらしく、壁にかかった鏡をのぞきこむ。

「インフルエンザかかってる時に三日徹夜とか、死亡フラグにも程



があると思うよ」

「そうなんだけどな……不眠症なんだ」

小さく苦笑した横顔を、つい凝視してしまった。

いつもは処方してもらった睡眠薬を飲んで寝ているが、たまに薬が切れた時などはこうやって寝不足になり、どんなに疲れていても眠れないのだと彼はいった。

薬をもらいに行かなければと思っていた矢先にインフルエンザにかかり、しばらくはインフルエンザ用の薬で眠れていたのだが、それも切れてしまった。

「じゃ、また病院行って薬もらいに行かなきゃ駄目じゃん」

進められるままクッションに座り、買ってきたびわゼリーや栄養ドリンクなどをわたす。

部屋の中はわりと片づいていて、せんとくんクッションなどネタ系グッズがぼつぼつ置かれている。

さつそくゼリーを口にしながら、高橋さんがつぶやいた。

「面倒くさくってな」。だから今日ひなが来てくれて助かった」

「市販の風邪薬で、眠くなるやつ買ってこようか？」

「いるだけでいいよ。だれかいれば眠れる」

「……わかった」

その言葉どおり、高橋さんはゼリーを食べ終わると床で眠ってしまった。

目の下には濃いクマが浮かんでいるし、少しやせたような気がする。

いつも笑っているから人生楽しくて仕方ないのかと思っていたけれど、そうでもないようだ。

彼に毛布をかけて冷えピタをとりかえて部屋を換気して、それでやる事がなくなってしまった。

お見舞いの品をわたしてすぐ帰るつもりだったけれど、人がいた方が眠れるというのならもう少し長居した方がいいんだろうか。迷ったあげくに台所を借りて、おかゆとゼリーを作ってみた。

味見をして「もう少し料理の勉強しておくんだっ」と軽く後悔したが、まあ……食べられなくはないし。ゼリーは普通の味だからOKという事にしておこう。

外はまだ明るかったので、あとは部屋の本棚にあった漫画を読んでいた。

夕方が近づいてきたころ。

ちょうど玄関の方だろうか。ドオン、と窓の外で重たいものが落ちた音がした。

なんだろうと顔を上げ、ついでにそろそろ帰ろうと立ち上がったとき、急に身体が引きつった。

動かそうとすると激痛が走る。

足がこむら返りになった時みたいに全身が引きつって、息苦しい。けいれん？

それとも、これが金縛りってやつだろうか。立ったままなるっておかしくない？ 何で？

背中に氷がはりついたみたいに寒くて、たらたら嫌な汗が出る。するつ、と音がした。

スカートを引きずるみたい、衣ずれの音。

それが背後から聞こえて、だんだん近づいてくる。高橋さんは目の前で眠っている。部屋には他にだれもいないはずだ。靴もなかったし、ひとり暮らしだといっていたし……それにこんな風にハアハアいいながら近づいてくる人なんて、生きた人間でも嫌すぎる。

「……っ」

高橋さん。

高橋さん、なんとかして。

助けを求めようとするが、声が出ない。

口は動くのに声がかすれて、まったく音が出なかった。

だんだん息苦しくなってくる。

ぼたぼたっ、と液体がしたたる音がした。

「さわんな」

不意に高橋さんが低くうなった。

悪夢から覚めたように唐突に息ができるようになる。やっと体が動いて、私はしばらくゼーハーゼーハーと深呼吸を繰り返した。

室内には私たち以外だれもない。

液体が落ちたあたりの床を調べても、ぬれた形跡は見当たらなかった。

息を整えてふり返ると、高橋さんはすでに身をおこし、上着を羽織っていた。

「送ってく」

「いいよ、病人だし。ていうか今の」

「平気平気。寝たら調子よくなった。熱も下がったし」

「こっちこそ大丈夫だって」

「じゃあ玄関まで」

二度目に通った玄関は血の匂いがした。

辺りに匂いの元はない。通行人も気にしていないようだった。

「絶対ふり返るなよ。少し寄り道して帰れ」

そういつて高橋さんに背中を押される。

とつさにふり返りそうになって、そのまま小走りになった。

「う、うん。じゃあまた」

あそこは幽霊マンションかもしれない、と帰りの電車でゆられながら考えた。

高橋さんの部屋もおかしかったが、よく考えるとエレベーターで気づくべきだった。

ふり返ってガラスを見たなら、ガラスに映った自分と目が合わないければおかしい。どうして自分の後頭部が映っていたのか。

ぞつと悪寒が走って、軽く首をふった。

これ以上考えるのはよそう。あそこにはもう行かない。それでいい。

駅まで眠ろうと座席で目を閉じていたら、近くにいた私服の女子高生が、

「なんか血の匂いしない？」

とヒソヒソ話を始めた。

高橋さんの言葉が脳裏に浮かぶ。

ふつう、暗くなる前にまっすぐ帰れといわないか。以前もあまり夜道を歩くなと忠告してくれた。

なのにどうして今日は「寄り道して帰れ」といったのか。ふり返ったらどうなるのか。

血の匂いの源が私についてきているから、それをどこかでまいてから帰れということ？

進行方向とは違う車窓の外を目で追いそうになって、とっさにうつむく。

いたたまれなくなつて車両を移り、駅からは本屋に寄って帰った。

その次の週。

高橋さんが家庭教師に復帰した。

クマは消えているし、血色もいい。

「治ったんだ。良かったね」

「ああ、この前はありがと。ゼリー美味しかった」

おかゆの味については聞かないでおこう。

お礼にもらったミストのドーナッツを机の前でかじっていると、

この前の説明をしてくれた。

あのマンシヨンは半年に1度くらい、飛びおり自殺がおこるらしい。

今まで5人くらい飛びおりたのだが、みんななぜか10階のわたり廊下から玄関の前へ落ちていくのだそうだ。

怪奇現象にあう人も多く、窓の外でだれかが飛びおりたのを目撃してあわてて下をのぞくとだれもいなかったり、エレベーターの中でミンチみたいに潰れた肉塊を見たり、部屋で金縛りにあったりする

るので空室も多い。

そんなわけで家賃が安いので住んでいるらしい。

特に高橋さんの部屋は去年飛びおりた人が住んでいた部屋で、クローゼットから骨や脳みそがはみ出た女が出てきたり、勝手にシャワーから水が出たり、夜中に首をしめられたりする。

普段はそういう悪さをしないように押さえこめるので時間をかけて浄化していたそうなのだが、この前は高橋さんが弱っていたので出てきてしまったそうだ。

「……行くんじゃないかった」

高橋さんが笑う。

「また来いよ。もう部屋には出ないから」

「成仏したの？」

「いや、ムカついたから消した。だから他のはともかく、俺の部屋にはもう出ない」

「他の場所には出るの？ 玄関とか」

「でるよ」

「じゃあ行かない」

いうと、高橋さんが不服そう顔をした。

「友達みんなそういうんだよな」

引っ越せばいいのに。

高橋さんが変になった。

毎週のように遊びに誘ってくる。買い物とかカラオケとか、オカルトと関係ない所だからそれはいいけれど、さりげなく「かわいい」とかいつてくる。以前は手にふれるのも躊躇して気を使っている節があったのに、軽めのスキンシップが増えた。気のせいか、たまに女を見るような熱っぽい目でこちらを見つめている。

トドメはこの前の家庭教師の日。

いつも通り私の部屋でおやつにシュークリームを食べていたら、カスタードがはみ出て左手がべたべたになってしまった。

人前でなめるのもお行儀が悪いかなと思ったので手を洗いに行こうとしたら、高橋さんに笑って手をとられた。

「手、べたべたじゃん」

くすぐったい痺れのような感覚とともに、熱くて湿ったものが手のひらを何度かなぞる。

一言でいうと、犬みたいにペロペロなめられた。

もう石化状態というか思考停止状態というか、声も出せずにいたら、高橋さんが蠱惑的な目でこちらをまっすぐ見つめたまま、私の指先にちゅつと口づけた。

うぎゃああああああああああ。

叫ばなかった自分を褒めてあげたい。

気障すぎてクサすぎて鳥肌が立つ。同時になぜか、心臓がきゅうううううと絞めつけられた。

「次のカテキヨの日、どーすればいいと思う……？」

後日、人気のない学校の裏庭で友達の明里と沙也に小声で相談しながら、私は軽くうつむいた。

明里がうつとりした表情で目を輝かせる。

「ひなちゃんが嫌か嫌じゃないかが大事だと思うんだけど」

沙也は対照的に顔を引きつらせた。

「ありえない。教え子に手だすって最低じゃん。クビにしなよ」

「沙也だって、大学生の彼氏がいるくせに」

明里がからかうように告げる。

「と、歳のことはいってないでしょ！ 光一さんは紳士だし！ そんな変なことしない」

「……クビにはしたくないな。高橋さんの授業も怪談も好きだし。ふつーにこのままの関係でいたいっていうか。スキンシップ過剰なだけかもしれないし」

つぶやくと、二人はまた対照的な顔をした。

「もう少し、様子みてみれば？ ヤバいと思ったらいつでもクビにできるでしょ」

と明里。

その言葉でちよつと気分が軽くなった。

「そうだね。そうする」

沙也がじとりにらんでくる。

「ひなた、隣のクラスの鈴木君好きって言ってなかった？」

「うん、そうだけど。鈴木君、最近林さんとつき合い始めたんだって。だからもういーかなーって。ほとんど話したこともなかったし」  
軽く笑っていうと、なぜか盛大にため息をつかれた。

「そういえば、と明里がいう。

「あたしも相談があるんだ」

## 首つり

家族で買い物に出かけた、帰り道。

すっかり日も落ちて暗くなり、一日の疲れがでて明里は後部座席で眠っていた。

家まであと少しというころ。

突然、車の窓にバンっとなにかがぶつかる音がして目が覚めた。

父が鳥でもはねたのかと思った。

けれど父は平然と車を運転しているし、助手席の母も音に気づいていないような顔で前を見ている。

気のせいだったのかな、とまたうとうとしたとき。明里の真横、後部座席の窓からなにかをたたきつけるような激しい音がバンバンバンバン連続で響く。

まっくらな窓の外に首にロープを巻きつけた腐った男がいて、後部座席の窓を激しく両手でたたき続けていた。全身緑がかっていて口からはだらりと長い舌をはみ出し、首が異様にのびている。身体にはびっしりとうじが湧いていた。

停車中も走行中もそれはずっと張りついたようについてきて、今も近くの木の影にいるという。

ずっと明里についてきているのだ。

「どうしたらいいと思う？」

彼女は困ったように笑った。

「戸和さんに相談してみたら？ あの子こついうの得意でしょ」

戸和さんはクラスで評判の靈感少女だ。

沙也の言葉に明里はほおづえをついた。

「戸和さん苦手。……ひなちゃん」

なんとなく目をそらしていたら、明里がしゃがみこんでかわいく視線を合わせてきた。

「高橋さんに相談してくれないかな」



「お礼になしてくれる？」

次の家庭教師の日、ニヤニヤしながら高橋さんがいった。

「……お金はちよつとしかない」

私のお小遣いは月千円だ。

バイトしようにも、中学生を雇ってくれる所なんてほとんどない。けっこうさ、そういう相談は多いんだ。オカルトで飯食ってくつもりはないけど、無償で引き受けてたらこっちの身がもたない。どうしても引き受けるものと、断るものの基準を作らざるを得ないんだよ。なぜかっていうと、そういう相談事を持つてくるやつはたいてい霊媒体質で被つても被つても霊を拾ってきたりする。俺が一生守つてあげるわけにはいかないだろ？ 嫌だし。拾わないように気をつけるとか自分で被えるようになるとか、その人自身がなんとかするのが一番いいんだよ」

「でも、困ってるんだよ」

「だから、なんかしてくれるなら引き受けてもいいよ。例えば俺の家に遊びにくるとか」

「え」

ぎしり、と錆びたロボットみたいに身体が硬直する。

この前は知らなかったが、姉情報によると一人暮らしの男の部屋に行くというのは「やらしーことされても文句いえない」的な意味があつたりするらしい。

まさか、そういう意味で誘われているのか？ いやいやまさか。勘違いだろう。友達と違って私はモテないし。

「でるからヤダ」

「部屋にはでないよ」

イスに座ったまま、高橋さんが軽く身をのりだす。

「マンション全部どこにもでないならいいけど」

「それはちよつと無理かな。バツチリ霊道通つてるし。だいたい靈なんて、まったくでない所の方が珍しい」

また行きたくない要素が増えた。

「ま、嫌ならいいよ」

高橋さんが私の髪をなでて、テキストの採点を再開した。

その横顔を見ながら少し考えて、答えた。

「いいよ、行くよ」

やらしーことされる覚悟を決めたわけじゃない。

彼の目の下にクマが浮かんでいたからだ。

変なことしたら、噛みついてやる。

学校帰り。

通学路の途中のファミレスで私たち四人はおちあつた。

「カッコイイじゃん」

面白がるように明里がささやき、

「腹黒そう」

沙也は鋭い視線を注いでいる。

沙也の好みはがっしりした男らしい人、平たくいえばマッチョなので高橋さんとは真逆だが、なにも敵視しなくてもいいと思う。

「ろりハーレムだな」

なんだと。

高橋さんはなんかゼリー系のデザートを食べていた。

ゼリーばかり食べて飽きないんだろうかこの人は。

一同が注文を済ませて店員さんが下がったあと、おもむろに高橋さんが口を開いた。

「明里ちゃんさあ、お父さんにこのこと話した？」

「え、ううん。うちのお父さんこういうの信じないから」

「俺にいわれたっていうのは伏せて欲しいんだけど、聞いてみな。」

あごにホクロがある三十歳くらいの、Ｔシャツ姿の男のことなにか知らないかって」

「すごい。本当に見えるんだあ」

喜ぶ明里。

沙也はあからさまに渋い顔をしている。

「明里のお父さんがなにかしたっていうんですか」

高橋さんがくすつと笑った。

「そうはいつてない。お父さんが家に連れて帰ってきたものだけど、明里ちゃんのそばが居心地よくてくつついてるんだろ。これは今日俺が持つて帰るから、もう明里ちゃんの所には出ない。それでいい？」

明里と私の方を見る。

ケーキに夢中になりかけていたのがバレたのだろうか。

「ありがとうございます」

二人でうなずくと、高橋さんがこの前のような話をした。

やたら長くて丁寧な説明だったが、要約すると「今後は自分できっとかきなさい」ということ。

明里は霊を引き寄せやすい体質で、おそらくそれは治らないらしい。今回の霊はそんなに厄介なものではないし、徹底的に無視するだけでいつの間にかいなくなるものもあるからそうしろ。今回は特別にお金はとらないが、霊能者なんてものに頼めば法外なお金を請求されたりむやみに脅されたり、逆に変な霊をつけられたりすることもある、とかその他もある。

あんまり長いので私は途中から聞いていなかった。

ちなみにファミレスの代金は全員分、高橋さんがおごってくれた。高橋さんと別れてから、げっそり疲れたような顔つきで沙也がいった。

「……そんな悪い人でもないかもね、あの人」

「うん。怒られちゃった」

同じような表情で明里がうなだれる。

当事者だけあってあの長い話を上の空で聞くわけにもいかず、全部まじめに聞いて疲れたのだろう。私も家庭教師のときたまに同じ目にあう。

「幽霊、いなくなった？」

話題を変えようと思って問うと、明里がにっこり微笑んだ。

「うん。ありがと！」

後日。

明里の父はデパートの設備管理の仕事をしているのだが、そのデパートのトイレで首つりがあったのだと教えてくれた。

発見し、遺体をロープから降ろしたのは明里の父で、首をつったのは三十二歳の男。あごにホクロがあり、汚れたＴシャツを着ていたという。

その週の土曜日。

お守りとパワーストーンと、防犯ブザーをカバンに入れて高橋さんのマンションを訪れた。

ちなみに、今日の玄関はゲロの匂いがした。

怖くて上は見れなかった。

そしてエレベーターの後ろガラスも見れなかった。

のってから気づいたけれど、もし次があればエレベーターまで迎えにきてもらおう。さりげなく天井にお札がはつてあるのが怖すぎる。

「よく来たな」

「約束だから」

上機嫌の高橋さんにうながされて奥へ入る。

部屋にはプレイステーション3が設置されていた。そばにはソフトが何本か転がっており、DSやDVDもある。ナナシノゲーム目というゲームが非常に面白そうだった。

「好きなので遊んでいいよ。俺は寝る」

なんだ、やっぱり勘違いだったんだ。彼はただ睡眠不足を解消したいだけだった。

恥ずかしいようなほっとしたような、複雑な心境で胸をなで下ろす。

「また薬切れたの？」

「いや、わざと飲んでない。少しずつ薬なしでも眠れるようにしていこうと思って慣らしてるんだ」

「……それはえらいと思うけど、それで寝不足で困ってたら意味ない？」

「ヤバいと思ったら飲んでるよ」

家で作ってきた桃とりんごのゼリーをわたすと、喜んで食べ始めた。

「高橋さんって偏った食生活してそう」

「心外だなー。俺は料理上手いよ。あんま作らないけど、作る時はけっこう本格的にやるし。今度作ってやるよ」

「ふーん」

だれか人がいれば眠れるんなら、家族と同居すれば困らないんじゃないかな、とふと思った。

でも、それはいつてはいけないような気もした。

「なんで眠れないの？」

高橋さんがスプーンを置いて、こちらへ寄ってきた。

「寝たら殺されるような気がするから」

息がかかりそうなくらい顔が近くてドキリとする。

高橋さんはふっと笑って、私のひざで眠ってしまった。

「またゲームしにおいで」

そんな言葉につられたわけではないが、別に変なことはされなか

つたし、共同玄関から異臭がしたり変な音が聞こえるくらいであまり怖くなかったので、あれからたまに遊びに行くようになった。

やがて、私は中学三年生になった。

「この調子なら志望校のランク上げれますよ」と高橋さんがうちの親に余計なことを吹きこんだり、そのおかげで進路についての家族会議が開かれたりしたが、それなりに平穏な日々を送っていた。

そんな時期に彼のマンションで聞いたのだが、高橋さんは小学校低学年のとき母親に殺されかけたそうだった。

家でうたた寝をしていたらいきなりクッションを顔に押しつけられ、泣いても暴れてもやめてくれない。もう駄目かと思ったとき、物音を不審に思った弟がドアを開けて入ってきて、ようやく母は手を止めた。

「今はふつーに仲いいんだけどな。当時はいろいろ大変で、精神的にキてたらしいんだ」

父の仕事の都合で転勤を繰り返していたのだが、そのころはちょうど幽霊アパートに住んでいたと彼は語る。

夜中にだれかがドアをかきむしる。だれも来ていないのにピンポンが連続で鳴る。壁に人形のシミが浮いている。寝苦しくて目を覚ますと、腹の上に不気味な影が乗っている。その他いろいろな心霊現象に高橋さん一家は悩まされたが、彼の母を精神的に追いつめたのは、子供の高橋さんが人形のシミと楽しげに会話する光景だった。しかも、ふとした瞬間に人形のシミの部分に変な女を見たり、高橋さんと会話する知らない男の声が聞こえてくる。彼を叱るとラッブ音が響き、窓が割れた。

そのうえ高橋さんは外でも幽霊が見えるなどというので小学校に呼び出され、近所からずいぶん不気味がられた。

「ほんと限界だったんだろうな」

夜中におきると母が包丁を手にじつとこちらを見つめていたり、突然知らない土地に一人置き去りにされ、考えなおしたように翌朝迎えに来たりされたこともあった、と彼は苦笑した。

「俺が幽霊幽霊いわなくなって、アパートも引っ越した後はそんなことまったくなくなっただけだ」

「……」

それですーっと不眠症をわずらっているのか。

幽霊に殺されるから眠れないのかと思っていたのに、想像以上のヘビーな話には私はなにもいえなくなっただけだ。

とりあえず、彼にクッション投げは厳禁だ。

「ごめん、引いた？」

高橋さんが顔をのぞきこんでくる。

「深刻そうに聞こえたかもしれないけど、俺はただの怪談レポートリーの一つくらいにしか思っていないから」

気にすんな、とほおをペタペタ触られた。

「あ、うん。眠れるように……なるといいね」

気の利いた言葉が浮かばず、高橋さんの頭を両手でなでると、彼はくすぐったそうに笑った。

「ちゅーしていい？」

「嫌だ」

## 斎藤さん・前編

春先のある日。

いつものように高橋さんのマンションでゲームに熱中していたら、チャイムが鳴った。

来客なんて初めてだ。

高橋さんをおこそうかどうしようか迷ったあげく、インターフォンに出る。

カメラには大学生くらいの男の人が写っている。

金に近い茶髪で目つきが悪くてしかめっ面で、背が高い。普通体型なのに筋肉質で、なにかスポーツというか暴力をたしなんている。うなただならぬ雰囲気だ。ただよっている。服は普通のシンプルなものだ、いかんせん眼光がするどすぎる。

高橋さんにこんな友達がいるとは信じがたいが、ひとり暮らしの彼を訪ねてきたんだからやっぱり友達だろう。……危ない知り合いでないことを祈る。

なんか怖そうなので居留守を決めこみたいが、あいにく部屋の主は私ではないのでそうも行かない。

「ど、どうぞ」

マンションの入り口はオートロックになっていて、中の住人にそれを解除してもらわないと玄関にも入れない。なので一言つけて玄関の力ギを開けると、少しだけ驚いたような顔をして入ってきた。

しばらくして、さっきの人がやってきたらしく部屋の方のチャイムが鳴る。

「すいません、高橋さん今寝てて」

ドアを開けて伝えると、ギロリと睨まれた。

「妹？」

「えっ」

「高橋の妹？」



「いや、ただの生徒です。家庭教師の」

勧めるまでもなく靴を脱ぎ、中へ上がっていた男がつと足を止めた。

「まさか今シャワー浴びてるとか？」

嫌そうなつぶやきに、こちら思わず嫌そうな顔をしてしまった。

「いや、寝てますって」

「裸で？」

「違います！」

ただの生徒だといったのになにを考えているのか。

ソファでだらしなく寝転がる家主を見せると、男が目を鋭くした。

「おこせ」

自分でおこせばいいのに。えらそーに。

内心少しムツとしたが、怖いので大人しく高橋さんをゆさぶった。

「高橋さん、高橋さん。お客さんきてるよ！」

ところが彼はなかなかおきない。

いつも夕方くらいまで熟睡しているから、それが癖になってしまっているのだろう。

しばらくゆさぶったのち諦めてふり返ると、男は放置されたままのゲーム機をじっと睨んでいた。

「あのー、おきないんで、自分で」

ずいっと紙袋をつきつけられる。

「そのロリコンにわたしとけ。中身は見るなよ。18禁だから」  
冗談なのか本気なのか、男は嘲笑するように口をつり上げた。

「はあ」

とりあえず受け取ると、意外とけっこう重かった。見下ろすと、箱のようなものが入っている。

男はすぐにきびすを返し、さっさと帰って行った。

夕方、目を覚ました高橋さんに伝えると、

「あー、斎藤かな。バイト仲間だよ」

と軽く笑っていた。

「バイトって、カテキョの？」

「そー、カテキョ」

あんな濃い茶髪に仏頂面で家庭教師がつとまるのか。  
よく見たらヒゲも生えていてピアスまでしていたけど。  
実はヤクザとかだったらしい。

こっそり思ったが、さすがにいわないでおいた。

二度目の遭遇はそれから一月もしない内におこった。

「またおまえか」

「保月ひなたです。 斎藤さん」

例によって高橋さんのマンションで、おきない家主を前にして斎藤さんとやらが睨んでくる。

「こいつといて気味悪くないのか？」

幽霊が見えることだろうか。

知らないふりをした方がいいかなと迷ったけれど、高橋さんの友達なら平気だろう。

「高橋さんは変だけど面白いし、私もオカルト好きだし、他にも霊感ある人知ってるから、別に」

「あつそ」

斎藤さんは小さな紙袋を置くと、その辺にあったメモ帳になにかを書いてこちらに押しつけた。

「ロリコンにはいうな」

それきり帰ってしまう。

来年には高校生になるし、そんなロリロリいわれる歳じゃないんだけど。だいたい、高橋さんにはからかわれているだけだと思う。

複雑な心境でメモを見ると、そこにはこう書かれていた。

「5月10日PM2時 駅」

ちやうど休みだったので来てしまった。

なんとなく、高橋さんのことで話があるんじゃないかと思ったのだ。

が、そこには話どころか本人がいた。

「ひな。どっか行くの？」

改札前で驚いたように問われて返事に困ったら、

「俺が呼んだ」

後ろにいたらしい斎藤さんが答えた。

「は？」

高橋さんが今まで見たこともないような形相でキレて、血の気が引く。

「こいつも連れてく」

「意味わかんねーんだけど」

よくわからないけれど、来てはいけなかったみたいだ。

冷え冷えした声音が怖すぎて、私はいった。

「ごめん、帰る」

「いいから来い」

斎藤さんに射殺するような目で睨まれる。

どーしろというのか。

高橋さんは珍しく厳しい顔で押し黙ってしまった。

でも、もうここまで来ちゃったし。

どうにでもなれと切符を受け取り、電車に乗った。

移動中、高橋さんは一言も口を利かなかった。斎藤さんも無口だし私もそんなに話す方ではないので、やけに静かだった。

駅からはバスになり、市民病院で降りた。

初めて来た所だがけっこう大きくて古い病院だ。壁が黒ずんでいて、所々ひび割れも見える。それでも患者は多いようで、駐車場はそこそこ車で埋まっていた。

「病院で何するの？ お見舞い？」

「見ればわかる」

「……ひな。その売店で一時間くらいお茶してまっててくれない

か？」

ようやく喋った高橋さんが猫なで声を出し、斎藤さんがそれをさえぎる。

「往生際が悪い」

二人の間に火花を見た気がした。

病院の受付で高橋さんが名乗ると、ほどなく白衣姿の男の人がやってきた。

たぶんお医者さんの一人だろう。

少しおどおどしていて、ころつとした体型がなんだかハムスターに似ている。失礼かもしれないが、ちょっと可愛い印象のおじさんだ。年上の年齢はよくわからないけれど、三十代後半くらいだろうか。

「遠くから来てもらって悪いね」

「いえ。こいつが前に話した斎藤です。この子は……まあ、邪魔はしないんで気にしないでください」

さっきまでの不機嫌はどこ吹く風といった様子で高橋さんがいう名札を見たところ、お医者さんは東山さんというようだ。

東山さんがきょとんとする。

「この子もなにかできるの？ 除霊とか」

除霊。

その単語を聞いてつい高橋さんを見る。

もしかして、心霊関係の用事でここに来たんだろうか。ちょっと前、山田さんに「心霊相談するなら金とるよ」とかいつてたけど、もしかして本当にお金もらって霊能者みたいなことしてるのかな。悪霊退治とか……ん？

おそらく東山さんは依頼人で、ここはいかにも出そうな病院で。つまり。

怖い話は好きでも怖い目にあうのは嫌いなくせに、自分で墓穴を掘ってしまったと気づいて私はひそかに頭を抱えた。

事前にそう説明してくれれば、頼まれてもついて行かなかったの

に。体験談を聞くだけで十分なのに……！

激しい後悔にさいなまれたが、もうここまで来てしまったら腹をくくるしかないだろう。

色々あきらめてため息をついた。

「いや、ちよつと勘がいいだけです」

「へえー。すごいなあ」

高橋さんの言葉に東山さんが笑う。

いやホントなにもできないんですといおうとしたら、東山さんが斎藤さんに「君背高いねー」とか話しかけたタイミングと同時に高橋さんが私の耳元でささやいた。

「病院でるまでしゃべるなよ」

笑顔なのに声が不機嫌なのが非常に恐ろしい。

テストで回答欄を間違えた時だってこんなじゃなかったのに。

……そういえば、こんな風に高橋さんに逆らったり怒られたりしたのは初めてかもしれない。

灯りはきちんとしていて清潔なはずなのに、病院の廊下というのはどうしてこんなに薄暗く、不気味な感じがするんだろう。

ぴかぴかに磨かれた床に蛍光灯の光が反射して鏡と化しているからだろうか。あるいは、死人、病人、怪我人が集うところというイメージがそう感じさせているだけかもしれない。赤ん坊だって病院で生まれてくるはずなのに、このつんとした消毒薬の匂いが誕生よりもそちらを連想させるのだ。

東山さんに先導されて到着したのは、だれも患者が入っていない空部屋だった。

外壁と違って特に不潔でもボロくもないし、普通の部屋のように見える。強いていうなら窓ガラスが曇りぎみなくらいだろうか。

おびえる小動物のように、東山さんがぎこちなく室内を指さす。

「ここで看護師が何人も変な影を見てるんだ。それに、あのベッドを使った患者はなぜか容態が急変して亡くなってしまふ」

同時にキインと耳鳴りがして、内心飛び上がりそうになった。

非常に嫌すぎるタイミングだ。

昔だれかが「耳鳴りは幽霊と目が合った合図」なんてエグイこといつてたのを思い出す。やめて勘弁してただの生理現象だよこんなのそーいうことにしといて。

目の前にあつた高橋さんの背中あたりの服をつかむと、彼はふとふり返り、私にデコピンを食らわせた。

絶妙な手加減でまったく痛くないが、びっくりしている間に無情にもすたすた室内に入ってしまう。いつの間にか斎藤さんも入っていて、私は東山さんと二人で部屋の前に立ちつくした。

「ベッドの下だ」

高橋さんの言葉に、斎藤さんがベッドの下にもぐる。

なぜか、ほこりを被ったクマのぬいぐるみをもつて出てきた。手のひらサイズくらいの小さなもので、ガムテープがへばりついている。

「ベッドの裏に貼りつけられてた。……看護師の女だな。痩せ型で歳は三十路くらい、髪を後ろで一つにしばってて、胸ポケットにガチャピンのシャーペン差してる」

「さん？　さんがどうしたの？」

東山さんが驚いたように部屋をのぞきこみ、高橋さんが補足した。「その　さんって人がこのぬいぐるみを使って呪いをかけてたんですよ。このベッドを使った人が死ぬように」

「え……！？　なんで彼女が」

高橋さんはちらつと斎藤さんを見る。

「そこまでは。とにかく、これでもう大丈夫だと思います。このぬいぐるみどうします？　良ければ処分しますけど」

処分してくれと即答して、東山さんが信じられないといった顔でぬいぐるみを凝視した。

「……そんな、ただのぬいぐるみで呪いなんかかけられるもんなの？」

「藁人形なんか使わなくても呪いはかけられますよ。人形やぬいぐるみとか、生き物の形をしているものが使いやすいのは確かですけど。自分や呪いをかけたい相手がよく使ってる愛用の品とかでもいいし」説明は高橋に任せる、といった様子で斎藤さんは黙々とぬいぐるみを紙袋につっこんでいた。

その後、東山さんに許可をもらって駐車場の隅でぬいぐるみに酒と油をかけて燃やし、私たちは病院を去った。

帰りぎわ東山さんが二人に封筒をわたし、私にどこからか持ってきたワッフルを1個くれた。

## 斎藤さん・後編

「高橋さんと斎藤さんって、霊能者だったんだね」

バスをまつている間ワツフルを食べつついうと、高橋さんが複雑そうな表情をした。

「ああ、まあ。……たまに知り合いに頼まれるんだ。こいつと会ったのも友達の紹介なんだけど、俺は人間の幽霊が得意で斎藤は人形とか物が得意だから、今日みたいに協力することもある」

「普段は一人なんだ」

高橋さんとはともかく、斎藤さんが一人でやってたら依頼人に怖がられそうだ。

ただ、斎藤さんって終始ブチキれているように見えるけど、顔と態度が怖いだけで根は普通かもしれない。

いかにも女慣れしてますって感じの高橋さんはいつもの事なのだが、さりげなく私のとろした歩調に合わせてくれるのだ。同い年の従兄弟でさえ、一緒に歩くとたったかたったか私を置いていつてしまうのに。成人男性が女子中学生の歩きに合わせるのはさぞイライラするだろうと思うのだが。

「今回は交通費込で一人十万。いつもは平均で8万くらいだな」

斎藤さんの言葉に耳を疑う。

「高っ!？」

交通費なんて、500円くらいしかかかっていないはずだが。

病院にいた時間もせいぜい一時間程度だし、使ったお酒と油だつてどんなに高くても2万もしないだろう。

「なんでそんな高いの？」

「ぼったくつてるに決まってるんだろ」

斎藤さんが皮肉っぽく笑い、高橋さんが眉をひそめた。

「わざと高くとって、依頼もってこないようにしてんだよ。前にもいったけど俺はコレで食ってく気なんてないし、依頼がなくなつて



も構わないんだ。……なのに、高い金とっても泣いて頼んでくるんだから馬鹿馬鹿しい。俺だってまだまだ素人みたいなもんなのにさ。有名な寺にでも行ったほうがマシだったって聞きゃしねえ」

以前明里に「霊能者なんてロクなもんじゃない」と諭していた彼が霊能力でぼったくっている。

それを知られたくなくて、高橋さんは不機嫌だったんだろうか。「斎藤さんはどうして私を呼んだの？」

彼がなにかいいかけたとき、タイミング悪くバスが来た。

駅について電車に乗って、もうすぐ最初の駅につくというとき、高橋さんのケータイが鳴った。

「はい」

電話ごしに叫び声のような、動揺したような声がかすかに届く。よく聞こえないけどトラブルだろうか。

「あー……東山さん。呪いって、そういうもんなんです。人を呪わば穴二つつていうでしょう？ 彼女は自業自得です。あのベッドで何人死にました？ 東山さんが気に病むことないですよ。それともあのベッドでまだだれか死んだほうが良かったですか？」

ぞくりと背筋に悪寒が走った。

そのいい方じゃまるで、さんという人が。

「はい、それで終わりです。あのベッドも使って大丈夫ですから。それじゃ」

高橋さんが通話を切る。

「今のって」

「さんが脳梗塞で死んだって」

あのぬいぐるみを燃やしたから？

平然としている二人を前に、乗り物酔いをしたみたいに気分が悪くなった。

駅について、ここで解散かと思ったならなぜか二人ともついてきて、歩きながら斎藤さんがいった。

「俺やこいつみたいなのとつるんでると、靈感がなくてもとばっちりを食うときがある。俺の妹はおかしくなつて死んじまつたし、こいつの友達も一人行方不明になつてる。……なのに、他人を平気で巻きこむこいつの気がしれない」

それを聞いて、彼は私に警告するために呼んでくれたんだと、ようやく気づいた。

マンションで金縛りにあつたときを思い出す。

あれは怖かった。苦しかったし、死んでしまふかと思った。

あれよりもつと怖い目にたくさんあつたから、高橋さんのお母さんは精神的に追いつめられたんだろつ。

「俺は友達も彼女も作んないなんて無理だ」

冷めた口調で高橋さんがいつて、斎藤さんも淡々と返す。

「線引きくらいできるだろ」

その日はそれで解散した。

色々なことがあつたからゆつくり考えたくて、それからしばらくプライベートでは高橋さんと会わなかつた。

家庭教師の日には会つてちゃんと会話もするけれど、内容は勉強やたわいもない雑談だけで、なんだか気持ちは上滑りしていく。

不思議と、高橋さんも私を誘わなかつた。

毎週のように遊んでいたのがウソみたいだ。

こちらから「週末遊びに行つてもいい？」と一言聞けば済む話なのに、なぜかそれがいえない。

正直、途中から「誘われるまでは行くものか」と意地になつていた。

認めたくないけれど、高橋さんが好きみたいだ。

すやすや眠る彼のそばでゲームするのが楽しくて、仕事以外の時間に優しくしてもらえるのが嬉しかった。彼の怪談は好奇心をそそられるし、怖い目にあつたときも助けてくれた。

正当防衛っぽいし、合法の範囲内とはいえ彼らのせいで人が死んだり、おかしくなってしまうた人や行方不明になった人がいることも忘れたわけではないけれど、それらを差し引いても距離を置きたいと思えない。

会えないと寂しい。

土曜日のお昼過ぎ。

気がつけば、高橋さんのマンションまで来てしまっていた。

……約束もしてないのになにやってんだらう。留守かもしれないのに。

チャイム押して出なかったら大人しく帰ろう、と一大決心でインターフォンを押すと、無言で玄関のロックが外れた。

いる、みたいだ。

恐ろしいことになってしまったのか、はたまた浮き足立っていてそれどころではないからか、今日はもう怪異すら気にならず、一人でエレベーターにのって部屋の前までたどりついた。

緊張しつつ部屋のチャイムを押すと、

「忠告してやったのに」

相変わらず怖い顔の斎藤さんがドアを開けてくれた。

「ごめんなさい」

眉尻を下げると、斎藤さんは自分の腕にはめていたパワーストーンのブレスレットを外して私の手にかけた。

「つけてろ」

「……自分のパワーストーン持つてるけど、それじゃ駄目なの？」

ついタメ口になってしまったが、彼は気にした様子もない。

「念がこもってないと意味ない」

「へー。ありがとう」

奥へ入ると、高橋さんはカーペットの上で寝ていた。

確かにそろそろ暑くなりはじめてきたけれど、なぜベッドで寝ないのか。そばにソファもあるのに。

「じゃあな」

いつも通り荷物と紙袋を手に斎藤さんは帰ってしまった。

あの紙袋には、以前のぬいぐるみたいなのが入っていたりするんだろうか。

「高橋さん、遊びにきたよ」

声をかけると、まぶたが少しだけ動いた。

話したいけれど、おきるまでまっただ方がいいだろう。今日もやつぱり寝不足みたいで泥のように眠っている。

寝顔を見ながらぼーっと考えごとをしていたら、昨日あまり眠れなかったせいか、いつのまにか私まで寝てしまった。

ぼんやりまどろんで目を閉じていたら、ふと汗の匂いがした。さらに、だれかの髪が顔にかかる。

くすぐったいなと思っていたら、温かくてやわらかいものが唇にふれて、息が止まりそうになった。というか止まった。

ちよつちよつとなにしてんのなにしてんのうああああああ。顔から火が出そうだったけれど、身動きしたらおきているのがバレてしまう。

どんな顔していいかわからなくて、必死に寝たふりを続けた。

されたのはほんの一瞬だったけれど、ものすごく長いようにも感じた。

やがて、軽く息がかかって離れる気配がする。

じーっと見られている気がしてしばらく目を閉じていたら、本当にまた眠ってしまった。

だから、本当に夢だったのかもしれない。

おきたとき、不気味なくらいに高橋さんの機嫌が良かったけど…

…。

告白するつもりだったのに、しそびれてしまった。

でも、あれからまた高橋さんが遊びに誘ってくれるようになった

から結果オーライかもしれない。……セクハラが増えたのは困惑したけど。

それと悩みも増えた。

以前からそうなのだが、高橋さんと遊ぶと食事代などをいつも全部出してくれるのだ。悪いからと断つても出してくれるし、お菓子やらアクセサリーやらぬいぐるみやらくれる。さらに先日、彼のマシンの最寄り駅までの定期券までわたされてしまった。

嬉しいけど、もらってばかりでいいんだろうか。睡眠不足解消くらいしかしてあげられないのに。

なんてひそかに考えていたころ。

夏休みに入ったので、友達の明里と沙也と一緒に海へ出かけた。

食べて泳いで、夕方。

オレンジ色に染まった空を見上げながら、駅をめざしてぶらぶらと歩いていたはずなのに、いつのまにか人気のない海岸沿いに出てしまった。

「迷ったね」

「うん、迷った」

「やっぱりさっきの道、右だったかな」

ああでもない、こうでもない道端で相談していたら、

「あ、あの子に聞いてみようか」

と明里が海を指さした。

そこには小さな人影が一つ。

近寄ってみるとそれは小学5、6年生くらいの女の子で、黄色い水着に浮き輪姿でぶかぶか浮いている。

二つくくりのかわいい子だ。

地元の子なのか周囲に親はいない。一人で海なんて、危なくないんだろうか。

浜辺まで歩いて、沙也が手をふった。

「ねえ、お姉ちゃんたち迷っちゃったの。駅までの道教えてくれな  
いかな？」

女の子はこっちに気がつくと思つて手をふり返し、沖からこちらへすーっと泳いできた。

やがて、浜から上がつてこようとする。

ほぼ同時に、二人がじわじわと後ずさる。

どうしたんだらうとふり返ると、沙也が叫んだ。

「ひなた、早く！」

「え？」

「こっち来て！」

明里まで。

この子に道を聞かないといけないのに、どうしてそんな遠くにいるのだらう。

疑問に思いつつ小走りで二人の方へ寄つて行くと、

「走るよ！」

直後走りだし、私もつられて駆けた。

「道、聞かないの？」

「いいから走れ！」

沙也が怒鳴つた。

やがて、海から離れた道路まで来てようやく二人は足を止め、事情を話してくれた。

あの女の子が浜から上がつてこようとしたとき、明らかに足がつく浅瀬にも関わらず座高が変わらず、腰から下が見えなかったのだという。

「それに、両手で砂をはうみたいにしてこっちに来ようとしてた」  
ぽつりと明里がいう。

夕方になつても暑くてじめじめしていたのに、ひんやりと背筋に悪寒が走つた。

「とにかく早く帰ろ。駅、あっちみたい」

沙也が標識を見上げてうなぐす。

「うん」

返事をして、なんの気なしにふり返つた。

視線を感じた、なんて明確なものではなく、手がかゆかったからかいたとかそんな無意識のものだ。

下り坂の先にさっきの女の子がいた。

浮き輪をしたまま、腰から下が存在しないみたいに道路から生えている。

目が合うと、嬉しそうにこちらへ手をふってきた。

「つ、ついて来てるんだけど……！」

「え！？」

「はあ！？」

それから三人で駅まで走り続けた。

電車にのりこんで、「なにあれ」だの「夜の海は怖い」だのとそれぞれ愚痴りまくって、ようやく一息つく。

けれど、私たちは同時に見てしまった。

ほとんど乗客のいない電車の中。向かいの窓の外に広くて暗い海が映っている。

そこに、小さな人影と見覚えのある浮き輪が浮かんでいた。

とても遠くにいるはずなのになぜか表情までもがくつきりわかる。恨めしそうな顔をして、あの女の子がこちらをじっと睨んでいた。

次の週の頭。

「ていうことがあったんだけど……」

高橋さんの部屋で私は頭を下げていた。

今日は寝不足ではないので一緒に遊ぶつもりらしく、部屋の主はゲーム機をセットしながらぶつくさいっている。

「俺といっても見えないのに、なんで明里ちゃんという時は見えるかなー。つか俺も海行きたかったのに」

女子中学生三人の中に混ざる気が。

「で、なんで土下座？」

「だって、心霊相談嫌いでしょ？」

「え？ 俺そんなこといつてないけど」

私の顔を両手で持ち上げ、高橋さんが驚いた顔をした。

「このまえオカルトで食ってく気ないのに増えて困るとか、馬鹿馬鹿しいとかいつてたし。それに私お金もってないし」

「まてまてまて。いろいろ間違ってるけどまず、ひなから金とったりしねーから」

どういうことだろうと見つめると、ちょっと顔が近づいてくる。  
かすかにシャンプーの香りがしてドキリとした。



## 海

「えーと、1個ずつ説明するからな？ 俺はオカルト好きだから。怪談も心霊スポットもコックリさんの類もオツケー。大好き。ここまではいいか？」

「う、うん」

なんとなく腰が引けてしまつと顔から手がはなれて、つつーとほおやあご、首筋をなぞってきた。

「次に、心霊相談も嫌いじゃない」

「え？」

「面倒くさいのや、俺の手に負えないよーなやつ以外ならな。でも仕事にはしたくない」

「好きだけど仕事にはしたくない、と」

そこはいまいちよくわからないので復唱してみる。

「そ。友達と心霊スポット行ったり、友達の心霊相談にのるのはいい。でも友達の友達とか、ろくに話したこともないやつの相談はごめんだから金とってるんだ。いくら好きでもそこまでやつたらキリないし、こつちだつてつかれる。馬鹿馬鹿しいっていったのは、ろくに知りもしない俺に高い金積んでも頼んでくる連中のこと。ひなならいくらでも相談していいから。……あ、明里ちゃんや沙也ちゃんの相談は却下な」

「なんで？ 私も会って一年くらいしか経ってないけど」

高橋さんがなにかいいかけて私の手をつかみ、もう一度顔を寄せてニヤリとした。

「わかんない？」

だから、そんな目で見られたら困るんだつてば。ドキドキすぎて変になる。

カッと顔が熱くなつて、あわてて目をそらした。

「たか、高橋さんってロリコンなの？」

「さあ。年下は好きだけど、こんな歳はなれてるのは初めてかな」  
ぎゅう、と手に力をこめられる。

そこまでのいうのに、肝心な言葉は口にしてくれないんだ。

「そ、それで、どうしたらいいかな？ その女の子がまだついて来て、一人になった時とかに出てくるんだけど」

高橋さんが笑って、

「かわいいーなー、ひな」

軽くほおに口づけてきた。

「！？」

思考回路が停止する。

そのままのポーズで置物みたいになっていたら、あっさり離れて高橋さんがいう。

「ひなはあまり幽霊に好かれるタイプじゃない。それもつけてるし、あの三人で遭遇したんなら明里ちゃんにつくдар。明里ちゃんの相談を却下にしたからって自分のことにしてもバレバレだから」

それ、の所で斎藤さんにもらってつけていたパワーストーンのブレスレットを指した。

斎藤さんにもらった物だとバレたときは「あのムツツリ野郎」とか毒づいていたが、どうやらこれが守ってくれたようだ。

「明里ちゃんと縁切る気ない？」

「本気でいってたら怒るよ」

「ごめん冗談。……でも俺、あの子に次から自分で解決しろっていったんだけどな」

「あ、違う。明里が頼んでっていったわけじゃないよ。明里は私と沙也に愚痴っただけだから」

彼女はそんな子じゃない。ちゃんと自分で解決しようと試行錯誤していたのだ。

「無視は難しいみたいだけど、できるだけ一人にならないようにしたり塩を持ち歩いたりしてるんだよ」

「ふーん。じゃあ、俺がアドバイスしたことは内緒にしてくれよ」

「ありがとう」

喜んでいたら、高橋さんが愛想よくほえんだ。

「一番、俺とプールに行く。二番、キス。三番、ここに泊まる。どれにする？」

五秒くらい、時が止まった。

「冗談だよな？」

「嫌ならいいよ」

「まって、せめてどれか難易度おとして！ レベル高すぎるよラスボス並だよ」

「なにいつてんだひな、こんなのまだまだスタート地点だ。プールなんてだんぜん気軽だろ」

「気軽じゃない」

以前ミニス力をはいたら堂々とガン見しまくってきたのはこの男だ。

妙にまとわりつくような、あんなはずかしい視線の前で水着なんか着れるものか。こちら手にふれるだけでいっぱいいっぱいの状態なのだ。

それを考えると。

「……三番」

たぶん、ゲームやDVDを観るくらいでいつもとそんなに変わらないだろう。

高橋さんが子供みたいな笑顔を浮かべた。

「今日？」

「また今度。それで、どうすればいい？」

「幽霊に好かれるやつって何種類があるけど、多いのは不健康と優しいやつなんだよね」

高橋さんは両方っぽい。

「こいつなら助けてくれそう、同情してくれそう、あるいは簡単にこっち側に来そうだと思ってついてくるわけだ。だから時にはキレるのもいいよ」

「そんなことしたら逆ギレしてこない？」

「してくるのもいるけどさー。幽霊って別にホラー映画に出てくるような最強の存在なんかじゃないから。人間の影みたいなもんだから、生きてる人間の方が強い。あつかい間違えたら死ぬようなのなんて俺も一回くらいしか見たことないし。あ、でも神仏関係だけは絶対に怒らせるなよ」

やっぱりヤバいのもいるんじゃない。

冷や汗が出たが、話が進まないのでもそこはスルーしておく。

「うん。じゃあ、明里には怒って見たらっていつてみる」

「いや、今のはただの今後の助言。明里ちゃんて人形とかぬいぐるみもってる？ 生き物の形のキーホルダーとか。できるだけ長くもってかわいがってる古いやつ」

「もってると思う」

彼女はかわいいものの好きだし、家にぬいぐるみもたくさんあった。「それに”助けてください”とか”身代わりになってください”とかって頼んで、ついて来てるやつに投げつけな。その後はふり返らずダッシュ。お盆が終わるまで、できるだけ水には近づかないこと」

ホラー雑誌に載っていた除霊方法ということにして明里にそれを伝え、さっそく三人で実践した。

人目のない林の中へ行き、ぬいぐるみを投げて走る。

私にはあの時の女の子は見えなかったけれど、逃げる最中になにか水に落ちたような、じゃぶんという音がした。

それ以来、あの女の子は出なくなっただろう。

けれど少し困ったことがある。

明里と遊んでいると昼夜とわず、変なものが見えるようになったのだ。

高橋さんの休みの日。

約束どおり泊まりがけで遊びに行くと、

「晩飯好きな作ってやるよ。なにがいい？」

とのことなので、荷物を置いて材料の買い出しに出かけた。

なんか本当に料理上手そうでちよつとくやしい。

とか思いつつも、手を恋人つなぎされて私は内心デレデレだった。周りに変な目で見られないか気にはなったけれど来年は高校生だし、高校生と大学生ならそんな変じゃないからいいやという事にしておいた。

いつもこれくらいのスキンシップなら歓迎なのに。

手をつなぐ前にキスしたりなめたりする方が変なのだと内心うなずいていたら、

「やっぱ車で行くか」

「え？」

高橋さんに手を引かれ、早足で駅のホームを引き返した。

アナウンスが鳴ったから、もう電車がくるのに。

「どうせこの電車止まるから」

わけがわからないまま一緒に階段をおりる。

直後。

「うわあああああああ！？」

部屋ごしみたいになんか少しくぐもった悲鳴。

不可解で気色悪いグチャツ、という音とともに電車がホームへ到着する気配。短く息を飲むような悲鳴。急ブレーキ音。

それらがすべてごちゃ混ぜになって鼓膜を襲った。

異様な空気に全身の鳥肌が立つ。

つかのま、身動きどころか息すら忘れた。

「……今の」

かすかにのぞく頭上の空はまぶしいくらい青く晴れわたっているのに、駅の中は影で黒くぬりつぶされ、立っている人の顔も判別できない。

にごった沼のように暗いそこを影たちが動きまわり、ざわざわと

騒ぎ始める。

「きゃあああああ！」

ホームの方から悲鳴やだれかが吐瀉する音が響く。

とっさに足を止めてふり返ってしまっていた私の手を、もう一度高橋さんが引いた。

「行こう。飛びおりだよ。グロいもん見たくないだろ？」

どうしてそんなに平然としていられるのか。

数分前に通った改札を再びくぐっていく。

「なんで電車がくる前にわかったの？」

「あのおっさん、すでに顔が死んでたから」

向かい側のホームにサラリーマンのおじさんがぐったりして座っていたらしい。

顔を見たら、「ああこりや飛びこむな」と思ったので引き返してきたとか。

「……全然わからなかった」

呆然としていたら、高橋さんが苦笑する。

「こういうのは俺より隼人の方が得意だったんだけどな」

後ろの方で「ただいま人身事故が発生いたしました」というアナウンスが響いた。

（こしやきゆうと）

西崎隼人という高橋さんの友人は、第六感だけで生きているような人だったらしい。

実生活や社会で役に立つようなことはほとんどできない。

「すっげー馬鹿だし、どん臭かった」

けれどおそろしく勘がよくて、いつも当たり前に幽霊を見ていた。失せ物探しもできたし、天気予報は百発百中。5万くらいの宝くじも数回当てていた。

特に死やケガ、病気の予知が得意だった。

中学生のころ、あんまり彼の成績が悪いので「このままじゃ留年だ」とテスト前に無理やり勉強させようとしたが、  
「テストは延期になるからまだやらなくていい」

と教科書を見もしない。

「なんで延期になるんだよ？」

高橋さんの問いに彼はこういった。

「今日か明日くらいに校長が死ぬ。全校集会で葬式やるからテストは延期」

校長は50代。歳ではあるが元気で持病もない。

勉強したくないいい訳だろうと思っていたら、翌日。

朝のホームルームで校長が車に轢かれて亡くなったと知らされ、西崎さんのいったとおりになった。

ただ、延期されたテストの直前になっても彼は一度も勉強せず、赤点をとるまくった。

本当に留年しかけたが担任教師が奮闘し、各教科の先生と交渉して学校を休みがちなことと授業で寝ていることへの謝罪文、プラス課題を提出すれば単位をもらえるようにしてくれた。

「別に不良とかじゃなく、ぼけーとしてるやつだったんだ。休みがちなのも寝坊したから休むとかそんなだし」

と高橋さんは語る。

またあるとき、西崎さんがクラスメイトに向かって、

「今すぐ眼科行ったほうがいいよ」

と告げた。

まったく関係ない話をしていたので周囲はいつもの天然ボケだろうと思ったそうなのだが、いわれた本人にはすぐ通じた。

「やっぱり？」

最近、目の前に黒い点がたくさん浮いて虫のように動いて見えるとか。

後日、眼科で網膜剥離になりかかっているといわれたそうだ。そんなエピソードが山ほどあるらしい。

中学時代は西崎さんや他の友だちと馬鹿なことをいっぱいした。

放課後、教室でコックリさんしたら教室が黒い影と笑い声で満たされ、それ以来でると評判の教室になってしまった。

深夜、神社でかくれんぼをして肝試し。

投身自殺の名所と呼ばれる崖のある海にあえて泳ぎに行ったら、得たいの知れない黒い渦のようなものに飲みこまれ、危うく死ぬ所だった。

心霊スポットでわざとヤバそうな霊にちょっかいをかけて、無事に戻ってこれるかどうかで賭けをした。

その他、たくさん。

西崎さんは中卒でフリーターになったので卒業後は会う頻度が減ってしまったが、それでも楽しかった。

だが、別れは突然おとずれた。



## 西崎さん

高橋さんが彼と最後に会ったのは、高校二年生の秋。

どきりとするほど赤味があった、巨大な満月の夜に西崎さんがやってきた。

アポイントなしに遊びにくるのはいつものことなので気にせず部屋に上げたが、彼は座らず、なにかいいたげにこちらをぼうつと見ている。

「どうした？」

妙に空気が重い。

西崎さんは少し気まずそうというか、はじらうように苦笑した。

「うん……実はさ、俺死んだんだ」

「え？」

「おまえには最後に会ったことと思って」

普通なら冗談いふたと怒る所だが幽霊は見慣れているし、彼は基本的にウソをつかない。

「マジで？ いや、死ぬなよ。おまえ事故とか予知できるじゃん。それで何人が助けたこともあるし、おまえだってまだ」

西崎さんが困ったように笑う。

「それは、無理だなあ。事故でも病気でもないし……それに俺17で死ぬってわかってたから」

「わかってたならもつと早くいえよ！ そしたら死に目くらいには会えたかもしれねーのに」

「どーかなー……俺は変に同情されるより、普通に遊べて楽しかったよ」

そこで唐突に目が覚めた。

西崎さんの姿はなく、月明かりにてらされた室内で時計の音だけが響いている。

時刻は4時まえ。

その日は疲れていて風呂上がりにソファで横になり、そのまま寝てしまっていたようだ。

けれどただの夢とはとても思えなくて、非常識を承知で彼のケータイに電話した。

でない。

寝ているんだろう。寝てるだけだ。

そう願いつつも高橋さんは着のみ着のままで西崎さんの家へ向かった。

西崎さんは両親がおらず、親戚とも不仲なので中学時代から仕送りでひとり暮らしをしている。

彼のアパートのドアは鍵がかかっていなかった。

暗い室内にはぬぎ散らかした衣服やカバン。物が散乱しているのはいつもどおりだが、心なしか生き物の気配がしない。

首つつてるんじゃないかと思うと電気をつけるのが怖かった。

けれど、西崎さんはいなかったそうだ。

遺書も書き置きも、なんの印もなく彼は行方不明になった。

そんな話を聞いて、出会ったばかりのころに高橋さんがやたらと私を心霊スポットに連れて行きたがったのは、西崎さんと遊んでいたころの名残かもしれないとひそかに思った。

「前に斎藤さんがいつてた、行方不明になった高橋さんの友達って西崎さんのこと？」

「そ。あいつの妹のことは俺も知らなかったけど」

「西崎さんが行方不明になったの、別に高橋さんのせいじゃないと思うんだけど」

あの時の斎藤さんは高橋さんのせいだともいいたげな口ぶりだった。

「ひなに警告したかったんだろー。あいつ、ひなのこと自分の妹に

重ねてみたいだし」

話している間に買い物も終わり、マンションに戻って料理しながら高橋さんがいった。

なんだかやたら丁寧に作っている気がする。見習うべきか。

「妹さんに？ 中学生なんて他にもいっぱいいるのに」

「……ま、嘘はいつてないし。俺にかかった呪いや霊障が俺じゃなくて家族や友達に行ったこともあるから、斎藤が警告する気持ちもわからなくはないよ」

呪いかけられたりするの？

それは怖いなあと考えていたら、なぜか高橋さんが真顔でこちらを見つめていた。

なんなんだ。

「高橋さんはいなくならないでね」

キッチンの隅で立ったまま告げると、高橋さんがぽろっと包丁を落とした。

危なっ！？

見てるこつちがぎゃっと飛びはねそうになったが、彼はまっかな顔をして叫んだ。

「ワンモア！ もっかいって」

「え……し、失踪しないでね？」

「うわ、デレた！ ひながデレた！ すげー、やべー、もう一回いってもう一回！ 録音する！」

鍋も包丁も放置し、謎のテンションでケータイをとりに行く。

まさか本当に録音する気じゃなからうな。

「デレた、って」  
心外だ。

私ってそんなに普段ツンツンしてる？

毎週通って態度で示しているつもりなんだけど、もう少し考えることを口にしたほうがいいのかもれない。

包丁をひろって鍋の火を止めると、笑顔全開の高橋さんがケータ

イを手にもちらへやってきた。

ちよつとム力つくのはなぜだろう。

ケータイを没収して、口を開いた。

「あの、伝わってなかったみたいだからいうけど、毎週高橋さんに会つの楽しみにしてるよ。休みの日も週1で遊んでるけど、普段は友達と遊ぶのだって月1くらいだし。返信しようがない内容のメールはたまに放置したりしてるけど、ちゃんと全部読んでるし。こんなしょっちゅうやりとりするの高橋さんくらいだし、男友達は高橋さんと斎藤さんくらいしかないし……だから……別に私ツンツンしてないよ」

むしろデレデレのつもりだよ！

少しは伝わっただろうかと様子をつかがうと、

「すげー嬉しい」

くくつと笑いながら高橋さんが抱きついてきた。

ぎゅーと力をこめられて、苦しいやはずかしいやら。ほんのちよつと気持ちよくて、胸が熱くなる。

そわそわと視線をただよわせていたら、さっきとり上げた彼のケータイが目映った。

録音しようとしていたので、画面が開いたままになっている。

まち受け画面には、私の寝顔が登録されていた。

「は!？」

がばつと体をはなそうとするが、はがい絞めにされていてぬけ出せない。

「ちよつと、なにこのまち受け。いつのまに撮ったの？」

「あー、それか。無防備な寝顔だったから、つい」

ついつて、他人に見られたらどうしてくれるのだ。肖像権とかいうやつの侵害だ。

「写真フォルダ見るよ」

他にもこんな変な写真があったらどうしよう。

こわごわとフォルダを開こうとするとパスワードがかけられてい

た。

「パスワードは？」

「教えない」

ゴロゴロのどを鳴らすネコのような仕草で私の頭に頼ずりしながら高橋さんがいう。

腕の中からぬけだすのに5分。

パスワード教える教えない戦争が停戦されるまで40分くらいかかり、結局、まち受け画像を変えろという妥協案で落ちついた。

夏休みの終わりごろ。

一人で街へ買い物に出かけ、ぶらぶらと服や靴をながめていたら、嫌いなクラスメイトと遭遇してしまった。

「あつ、姫！」

訂正、大嫌いだ。

くるつときびすを返して見なかったことにしようとしたのに、すたすたと後をついてくる。

「姫、姫どこ行くの！？ 買い物！？ 一人！？」

でかい声で姫姫よぶなはずかしい。

茶髪にちよつと派手な服装。

いかにもチャラ男風の外見も苦手だが、なぜか私を姫よびしてくるのが一番気に食わない。鈴木君は教室でも外でもこんななので、できるだけ避けていた。

「……その、姫ってよぶのやめて。はずかしいから」

「じゃあジュリエット？ シンデレラ？」

ぎゃああああやめる鳥肌が立つ！

美少女でモテモテの明里ならサマになるかもしれないが、私がそんな風によべたら笑い者にしかないだろうが。嫌がらせか厨二病か知らないが迷惑だ。

「普通に苗字でよんで。あと声大きいからもっと小さい声でしゃべって」

「うん、姫」

わかってない。通じてない。

めまいを覚えたとき、

「嫌がつてるからやめてやれ」

ぽすつとだれかの手が頭にのせられた。

ふり返った先には茶髪とピアス。不良というよりヤクザ寄りの怖い顔。派手な外見でも、見慣れたせいにかこっちはほっとする。

「斎藤さん」

「え……姫のお兄さん？」

ドン引きって顔で鈴木君が問う。

地味で大人しい私にこんな知り合いがいようとは、思いもよらなかったんだろう。

「保月」

訂正するようにらむと、

「……保月」

しぶしぶといった感じに訂正した。

ちよつと気味がいい。

「じゃあね」

長居は無用、と斎藤さんとその場を去る。

「マセガキめ」

歩きながら斎藤さんが吐きすてた。

「ありがとう。助かったよ」

「ああいうのは相手にするな」

「する気なかったんだけど目が合っちゃったし、ついてくるから…」

…」

こういふとなんか幽霊みたいだ、鈴木君。生きてるけど。

「そうだ。聞こうと思ってただんだけど、このブレスレットって浄化？ とかした方がいいのかな」

パワーストーン特集がのった雑誌などを読むと、定期的に塩や日光で浄化したり水晶の上にのせたりした方がよいとよく書かれている。

斎藤さんはふと私の手首をもち上げると、そこにかかっているブレスレットを数秒見つめ、

「まだしなくていい」

とだけ答えた。

「したら良くない？」

「念も薄くなるからな。なにかあるのか？」  
するどい。

「ううん、ちょっと気になっただけ」

夏休み明けに修学旅行へ行くのだが、色々とそういう噂の多い場所なのでお守りを強化しておきたかったのだ。

修学旅行の当日。

「5日間もひなに会えないなんて死ぬ。干からびて死ぬー」  
大げさだ。

いつも力テキヨも含めれば週3回くらい会っているけど、5日間なんてあつという間なのに。

高橋さんからのメールを見て、笑ってしまった。

修学旅行自体は2泊3日だが、今週は力テキヨがお休みなので会えるのは5日後の週末なのだ。

「お土産買ってくるね」

返信して、クラスのバスへ乗りこんだ。

すでに半数くらいが乗車していて、みんな眠い目をこすりながらも楽しそうに雑談している。

「おはよう」

「おはよ」

沙也と挨拶がてら両手をタッチして、隣に座る。

明里がまだ来ていないことを確認して、ちらりと視線を交わす。

「お守りもってきた？」

「この日のために神社で買ってきた。600円だけどね」

沙也が財布からちらりとお守りをのぞかせる。

彼女は”でる”所へ行くと頭痛や吐き気を覚える体質だが、霊を見ることはない。私と同じように明里という時だけ見えてしまうそう  
うだ。

そして旅行中はずっと明里も一緒に行動する。

お互いごくり、と息を飲む。

「楽しい修学旅行にしようね」

「当然！」

沙也がいい切った。

なにこともないといいけど。



## 修学旅行・前編

飛行機に乗りかえて沖縄へ到着し、そこからは観光バスで現地のガイドさんと共に各地を回った。

ガイドさんが歌ってくれた沖縄民謡が素敵でみんな明るい気分だったけれど、途中からは慰霊塔や戦争記念館、防空壕といった所をめぐり、お年寄りの体験談を聞いたのでなんだか気が滅入ってしまった。平和学習は必要だとは思うけど、好きになれない。

同時に、お守りをもってくる必要はなかったかもなと少し思った。たぶん、こういう所は先祖の墓参りをするような気持ちでいれば大丈夫だ。

黒い影がたくさん見えたりしてもものすごく怖かったし、頭の中ではずっとお経を唱えていたけれど、むやみにおびえて騒ぐのは良くない気がした。

その後はホテルへ行き、晩ご飯を食べてお風呂に入って、就寝前の自由時間になった。

そこで私たち三人は固まった。

クラスで集まって怪談をしようというお誘いが来たからだ。

正直、興味はある。怪談は好きだ。でも明里もいるし、メンバーには変なものに憑かれてる奈緒美ちゃんも霊感少女の戸和さんもいるのだ。なにもおこらないはずがない。

「どうする？」

「面白そう」

と明里。

「クラスのみんなが集まってるっていうなら」

と沙也。

大部屋に割りふられた子の部屋で集合らしいのでそこへ行くと、すでにみんな来ていてかなりの密集具合になっていた。女子部屋なのだが、男子までちゃっかり集まっている。

「保月、保月！ こっちこっち！」

鈴木君がばしばしと自分の隣をしめす。そんな周りに男子しかない場所へ行くわけがない。

困っていたら、

「いちいち相手しないの」

明里にぼんと肩をたたかれた。ついでに「嫌だつて」と鈴木君を追いはらうように手をふる。

沙也がいたわるような目をむけてくる。

「嫌なら嫌ってちゃんといわないと駄目だよ」

「うん。ありがと」

二人に感謝しつつ、三人で壁際にすわる。

ラッキーなことに戸和さんの近くだ。彼女のそばなら安心な気がする。

「じゃ、あたしから時計まわりでいい？」

奈緒美ちゃんがあたりを見回して、怪談を始めた。

語り上手でけっこう怖かった。

その後も、聞いたことはあるけどなかなか面白い怪談が続く。

明里が沙也に抱きつき、私は明里に抱きついてきやあきやあ固まり、三人で毛布を被りながらも楽しんでた。

そうして、戸和さんが語る番になった。

しんと静まり返った室内でカーテンが風でゆれる音だけがひびく。「半年前の話なんだけど、毎晩夜中の二時に間違い電話がかかってきたの。非通知着信なんだけど、いつも同じ人だつてわかるんだ。なんでかっていうと、いつも”早く帰ってこい。こんな時間にでかけるてなに考えてんねん。飲酒運転になるやろが！”って録音を残すから。いっつも怒ってておんなじこというんだ。それがちよつと面白かったんだけど、一ヶ月くらい続いていい加減しつこかったから電話にでたんだよね。そしたら」

無言。

だが、こんな時間に非通知でかけてくる知り合いなどいない。な

んてしらじらしい奴だとカチンときた。

「あの。いっつも番号まちがえてますよ。もうかけてこないでください」

謝ってくるか、ブツ切りされるか。

そう思っていたが、

『間違うてへん』

男はいい切って通話を終えた。

「それきり電話がかかってこなくなったから、ただの逆ギレだと思っただけだ。このまえ、留守録の容量がなくなったから古いの消すついでにおじさんのやつを再生し」

コンコン。

戸和さんの怪談の最中、隣の部屋から壁をたたくような音が大きく響いた。

一同がびくつとそちらをふり返る。

静まり返っていた室内でそれはあまりにハッキリと聞こえた。

「なんか呼んでる？」

「イタズラじゃね」

クラスメイトたちが軽くざわめく。

いつもそろいの髪型で双子のように仲がいい二人組の少女が、こわばった顔でつぶやいた。

「隣、あたしらの部屋だからだれもいないはずなのに」

なんともいえない、不気味な沈黙が広がった。

風かなにかで物がぶつかった音だと考えるには生々しすぎる気配がしたからだ。

だれも動けず話せずにいたらふと、戸和さんが笑った。

「お開きにしたほうが良さそうだね。私ついてたげようか？」

なぜか代わりに奈緒美ちゃんが返事をする。

「うっん、ゆっこたちこの部屋に泊まるからいらない！」

「そう」

二人が心細そうな視線を送るが、戸和さんはあっさり引き下がっ

た。

一気に空気がゆるみ、すっかりお開きモードでみんなそれぞれ雑談しながら自分の部屋へ帰っていく。

明里たちと団子のように固まっていた状態からはなれ、私は戸和さんの後を追った。

消灯時間がせまり、ぼんやりうす暗い廊下に彼女を見つけるが、  
「小林くん、昼間に防空壕でイタズラしたでしょ。修学旅行おわつたらすぐお被い行ったほうがいいよ」

クラスの男子に小声でささやくそれを聞いてしまつて、声をかけられなくなる。

小林くんはびくりしたような顔をして、

「し、してねえよ」

足早にさつて行つた。

いや、その顔はしたでしょ。

あんな洒落にならない場所なんて怖いもの知らずな、とあきれ  
ていたら戸和さんがふり返つた。

「どしたの保月さん。なにか用？」

「あ、話の続きが気になつちゃつて。留守録を再生したらどうなつたの？」

彼女は軽くふき出し、笑顔でバシバシ肩をたたいてきた。

「保月さんてばもー、あんなの留守録がぜんぶ気持ち悪いノイズに  
変わつてたつてだけのオチだよ！」

「え、それじゅうぶん怖」

「非通知拒否つても非通知でかかってくるからイラッとしたけどさ  
ー、私の電話番号に執着してただけみたいで。番号だけ変えたらか  
かつてこなくなつたんだ」

「たまたまその番号になつちゃつたら怖いじゃん。何番だったの？」

「えつとねー」

将来ケータイ番号を変えたときのためにそれを暗記しておく。

ノイズが入った留守録をまだとつてあるそうで「聞く？」と目を

輝かされたがお断りした。

怪談を聞くだけなら自分的にセーフだが、そこまでしたら夢に出そうだからアウトだ。

「じゃね。おやすみ！」

ひらひら手をふって彼女がさっていく。

「おやすみー」

戸和さんってちょっと高橋さんに似てる。

明里と沙也のまつ部屋へもどりながら、そんなことを考えた。

じんわり暑い闇の中。

正確にはわからないけど、おそらく3時か4時くらい。耳元でぼそぼそと話し声がした。

「ダメ。連れていけないの」

明里の声だ。

「くーん」

「こんな所にいないで早く成仏しなさい」

「きゅーん」

ぱさぱさ、と奇妙な音。

薄目を開けると、茶色のしっぽがゆれているのが見えた。

犬？

ぼんやり視線を動かすと、しっぽの先が存在しない事に気がついた。

犬のしっぽのようなものだけが床に存在し、ぱたぱたとゆれている。

え？ これ、幽霊？

ちよつとかわいいかも。

おきようとしたが、身体が動かない。

「あか、り」

代わりに口を動かすと、かすれた声が出た。

とたん、しつぽの辺りから「ヴヴッ！」と獣の唸り声。今にもこちらに飛びかかってきそうな殺気に血の気が引く。

けれど、

「こらっ！」

明里が一喝すると気配ごとしつぽが消えた。

同時に身体が動くようになって、どっと冷や汗が出る。

「……あ、明里。なにと話してたの？」

彼女はジャージ姿のまま、疲れたように壁にもたれた。

「わかんない。犬かと思ったけどなんか凶暴だし……キツネじゃない？」

「茶色かったよ？」

「なんだろうね？」

どこから来たのか知らないが、いきなり顔をなめられて目が覚めたという。

それから二度寝して起床時間におきると、隣の布団で寝ていた沙也がおきるなり顔をしかめた。

「獣くさい」

朝食を終えると、高橋さんからメールがきていた。

「おはよー。今日は授業だけでヒマ。そっちは夜這いとかされてない？」

「されるわけないでしょ」

「ひなは隙だらけだから」

そんなことはない……と思う。高橋さんの前だとちょっとガードが緩くなってしまうだけで。

昨夜と今朝のことを話すと長くなるので、簡潔に返信した。

二日目の午前中は海水浴をし、午後からは自由時間ということで、私たちは三人で街を歩きながらお土産を物色していた。

食べ物かキーホルダーか、アクセサリー系か。

どれにしようかと頭をひねっていたら、

「保月、ちよつといい？」

めずらしく普通の声量で鈴木君が声をかけてきた。  
沙也が私の肩をつかむ。

「ひなた。嫌なものは嫌ってハッキリいいな」

「ちよつと話したいつつただけだろ！」

顔を赤らめるクラスメイトを見て、冷や汗が伝った。

え？ ……もしかして、鈴木君ってそうだったの？ 今までのって完全にただの嫌がらせだと思ってたんだけど。

「えーと、じゃ、ちよつと行ってくる」

「ひなちゃん、勢いに負けちゃ駄目だよ」

と神妙な顔の明里。

どれだけ押しに弱いと思われてるの。

これでも訪問販売を断るのは得意だ。お母さんはいませんってやる。

「大丈夫だよ」

冗談はさておき、連れられるまま人気のない場所に移動すると、おもむろに鈴木君がいった。

「もうわかってると思うけど……好きだ！ 姫！」  
姫っていうな。

なんて文句も出ないほどぼかんとしてしまった。

いや、確かに数分前から気づいてた。気づいてたけど、生まれて初めて告白されたよ私。

以前自分も告白しようとしたからわかるけど、告白するってすごい勇氣いるのに。すごいなあこの人。

「私なんかのどこがいいの？」

「や、姫ってけっこう……アレだし」

アレってなに。

「今度姫ってよんだら無視するから」

「じゃあ保月ってよぶから」

妙に真剣な目で見つめられて、ちよつとドキッとしてしまった。

「ご、ごめん。ありがとう。気持ちは嬉しいけど」

「嬉しいならいいじゃん」

良くない。

「好きな人いるから」

友達以外にこれを伝えるのはけっこうはずかしい。

「えっこの前のヤクザ？」

「違う違う、別の人」

あとたぶんヤクザでもないと思う。

「じゃ、カテキョとつき合ってるってマジ？」

とつさに言葉につまってしまった。

つき合ってるわけじゃないけど。

「だれに聞いたの？」

明里と沙也にしか話していないけど、二人は違う。

三人で話しているのをだれかに聞かれたか、高橋さんと遊んでい  
るのを見られたかだろう。

「マジなんだ。えー、じゃあカテキョのたびに部屋でやらしいこと  
してるわけ？ それって犯罪じゃね？ 援交みてーじゃん」

「変なことなんかしてないよ」

……ちよつとしか。

思わず顔が熱くなる。

髪をなでられたり肩を抱かれたり、手なめられたりはしたけど。  
ちゃんといつも勉強している。私だって受験生だ。

「じゃ、相手にされてないんだ」

距離をつめられてなんとなく後ずさる。

「それは……鈴木君には関係ない」

「今告ったじゃん、関係ある」

「ない。片思いでも私は高橋さんが好きなの」

いつてしまつてから急に恥ずかしくなった。

うあ。鈴木君も目が点になっている。

いたたまれなくなつて、私は逃げ出した。



## 修学旅行・後編

からつと晴れた空の下。

そばの土産物屋からはエキゾチックな三味線の音が響いている。

二人と合流して、少し落ちついたあと。

道端で紅いもアイスを堪能していたら、明里がふらりと路地の方へ歩いて行ってしまった。

「明里？」

「ネコでもいた？」

「あれ」

彼女が指さした方を見て、私と沙也はぎょつと身をこわばらせる。人が立ちよりそうにない路地の奥に小さな古道具屋があった。

学生のお土産に、という感じではなく、小金持ちの好事家やお年寄りが好きそうな感じの古くてひっそりした店だ。

日差しが強いので問題はないが店内に照明が灯っておらず、店員も客もいない。奥は影になっていてよく見えない。

その空間からまっ白な手が「おいでおいで」とこちらに手招きしている。

まったく透けていなくてハッキリくつきりしているのに手の先に身体はなく、それは大きな鏡の中から生えていた。

「キモイ」

沙也が吐きすて、遠ざかろうとするが明里はぼつと鏡を見つめて動かない。

「でも別に怖くないし。悪いものじゃないのかも。”私を買って”っていつてるみたい」

正気かと激しくつつこみたい。

霊に好かれる人って霊に惹かれやすかったりするんだろうか。

「あんなの大きすぎてもって帰れないでしょ。ぜったい高いし」

引きつった顔で沙也が明里の腕をつかみ、大通りの方へずかずか

歩く。

その隣を歩いていたら、背中が急にヒヤッとして反射的にふり返った。

視界のすみで、異様に長い白い手が明里の背中をつかんだ。鏡からのびているので、約十メートルはあるだろうか。その尋常でない長さで友人の危機に泣きそうになってとっさに彼女にしがみつく。沙也もつかんだままの明里の腕に力を入れてぐっと踏みとどまろうとするが、まるで止められずに三人そろって引きずられていく。

店まであと五メートルもないというとき、犬が吠えた。近所の犬みたいな生やさしいものじゃない。

まるで猟犬が獲物をかみ殺すために追いたてるような、聞いているこっちまですくみあがるけたたましい声。

私たちを引っぱる力がやんだ。

白い手は消え、犬もどこにもいない。

しばらく呆然としていたら、沙也が顔をしかめた。

「犬の匂いがする」

明里は大丈夫だろうか。

様子をうかがうと、恐ろしいことに彼女はさっき引きずりこまれそうになっていた店の中に自ら入って行ってしまった。

「明里!？」

自殺行為にもほどがある。あんな目にあってもあの手は悪いものじゃないというつもりだろうか。

あわてて後を追うと、いつのまにか中に店員さんがいた。

「いらっしやい」

頑固そうなおじさんだ、

こちらを一瞥するなり、広げた新聞に視線を落とす。

私がびっくりしている間に、明里はいろんな物が雑多に飾られている棚からなにかをとり、おじさんにたずねた。

「これ、本物ですか？」

黒とこげ茶が混ざる、小さな毛皮のキーホルダー。  
見た瞬間にあつと声を上げそうになった。

今朝のしつぽが小さくなったみたいにそっくりだ。

「ああ、犬の毛だよ」

お爺さんの言葉に明里は少し眉をひそめたが、

「これください」

と財布を出した。

千円くらいだった。

「キモイキモイキモイありえない！ 返してきなよそんなの。犬殺して皮はいで作ったやつでしょ？ 動物の死体なんてもち歩いてなにが楽しいの？ 悪趣味じゃん。呪われそう」

店の外でまっていた沙也が露骨に嫌な顔をする。

その意見には賛成だし、明里もきつとそうだろう。しかも怪しげな店で買ったものだし。

でも、今回に限り反対する気にならなかった。

「それって、もしかしてさつき吠えた犬？」

明里がうなずく。

「あそこで売ってるって知ってたの？」

「ううん。でもきゅんきゅん鳴いてたからそうだと思って……助けてくれたから、連れて帰ってあげることにしたの」

このキーホルダーは今朝の犬だと思う、と彼女はいった。

「そいつさつきの手とグルなんじゃないの？ 泣いた赤鬼的な」

沙也が冷ややかなまなざしを向ける。

「そんなことないって」

と明里。

「見てもいい？」

本当に犬の毛なのかと手をのばしたら、耳元で低い唸り声がした。

「それが嫌いみたい」

明里が私のブレスレットを指さした。

修学旅行から帰ってきた週末の昼下がり。

ミスドでお茶しつつ私は高橋さんに旅行中のことをかいつまんで話した。

ひと通り聞き終えて、高橋さんがなぜか軽くふてくされたように問う。

「なんでミスド？」

「落ちつくし長話しやすいからだけど。嫌いだったっけ？」

「というか、主に怪奇体験を話したのにそれについての感想はないのか。」

高橋さんは私のほおを軽くなでた。

「嫌いじゃないけど、ここじゃ抱きつけないじゃん。5日ぶりなのに」

人前でそーいうことをいうんじゃない。

「だ、抱きつかなくていいの。会って話せば」

つい小声になってしまった。

高橋さんがほおづえをつき、なんとも意地悪そうな顔をする。

「本当に？ ひなは俺にさわりたくない？」

「……っ」

本当は、ちょっとだけ。

さらさらした黒髪をなでたいし、歩いてる間に手をつなぐのが嬉しい。

でも、鈴木君の言葉が脳裏によみがえって胸がざわざわした。

せめて、家庭教師の期間が終わるまではこれ以上のスキンシップを避けた方がいいんじゃないだろうか。

そもそも高橋さんのこういう態度がわからない。

好意は感じるが、教え子をからかっているだけなのか、一時の火遊び的感覚なのか、本気なのか。

「高橋さんって、私のことどう思ってるの？」

「かわいいーと思ってるよ。すつごく」

聞きたいのはその言葉じゃない。

複雑な心境で口ごもると、

「なんかあつた？」

高橋さんが優しげにたずねた。

「カテキヨとやらしーことしてるのかとか、相手にされてないんじゃないかとかいわれた」

「へえ。なんでそんなこと言われたわけ」

「さあ。たぶん今日みたいに会ってる所を見られたんだと思うけど」

「そーじゃなくて。そもそもどうしてそんな話になった？」

「え」

それは非常にいいにくい。

思い出すと勝手に顔が熱をもった。

「告白されてふつたら逆ギレされたとか？」

なんでわかるの。

驚いて高橋さんを見ると、彼は一瞬だけ不機嫌そうな表情を浮かべ、おだやかに微笑んだ。

「このまえ同い年くらいの男にからまれてたらしいけど、そいつ？  
チクつたな斎藤さん。」

やましいことなんかないのに、妙な後ろめたさがこみ上げてきて視線をそらす。

「でももう断ったし。それよりカテキヨの会社や親になにかいわれるほうが心配じゃない？」

「ひな本人が訴えたんじゃないやなきやどうとでもなるよ。最悪ほかのバイト探すし」

それきりしばらく会話が途絶えた。

普段は高橋さんの方がよくしゃべるので、黙られると困ってしま  
う。

そわそわしたあげく、話を戻してみた。

「明里の所にでた犬、どう思う？」

動物愛好家としては仲良くなってみたいけれど、パワーストーンを嫌う所を見ると、よくないものなんだろうか。

「明里ちゃんの話は聞きたくない」

酷くつつけんどんにいわれて、おどろいた。

「ごめん。別に明里の心霊相談をして欲しかったわけじゃなくて、高橋さんも怪談好きだから興味あるかと思って」

「……」

はああ、と大げさにため息をつかれた。

「明里ちゃんの自己責任だよ」

「えっ」

「本人が望んでそばに置いてるならほうっておけばいい。ただ、その犬が”守ってやるからいうこと聞け”とかいい出したら赤信号かな」

「……覚えとく」

おっかなびつくりうなずくと、外へ出ようと示された。

無言。

ひたすら無言で街中を歩く。

気まずくて仕方ないが、このまま帰ったらもつと気まずくなるんじゃないかとヒヤヒヤして脳内で必死に話題を探した。けれど、滅多に見ない不機嫌な横顔に話しかける勇気が出てこない。

やがて駅につき、しぶしぶ改札に向かおうとしたらそちらではなく、ふだん通らない地下への階段を降りて、人気がない寂れた場所にきた。

「俺あの子嫌い」

高橋さんがつぶやく。

「あの子？」

「明里ちゃん。」あたし可愛い”オーラ出まくっててなんかムリ。守ってもらって当然女の子あつかい当然みたいな図々しい所とか。あのこびこびのネコなで声なんとかならないの？ 学校にくそ派手な髪飾りつけてく神経も理解できないけど、なんか天狗ってか勘違

いしてね？ 本当にひなと友達なの？」

彼がだれかの悪口をいうなんて珍しい。

どうしてこんなに不機嫌なんだろう。

緊張で裏返った声がでる。

「友達の悪口は聞きたくないよ。それに明里は優しくて賢い、いい子だよ」

高橋さんが嫌そうな顔をする。

「賢いかもしれないけど、優しそうには見えなかったな」

「心霊相談になっちゃったのはごめんってば。沙也のこともそんな風に思ってたの？」

「いや、沙也ちゃんとは別に。興味ないっつーかひなが明里ちゃんラブなのが一番ムカつく」  
「なにそれ」

いつのまにか壁際に追いつめられていて、正面から覆いかぶさるように抱きしめられた。

「ストレートに言わなきゃわかんないだろうから言うけどさ。明里ちゃん明里ちゃんって女同士でべたべたしすぎだろ」

顔は見えないけれどその声は嘘や冗談と思えないくらい感情的で、怖いのか抱きしめられてドキドキしているのかわからなくなった。

「べたべたって、女同士はこんなものじゃない？ 別に明里だけじゃなく沙也の話もしひゃっ!？」

ぬれた舌が首筋をなぞる。

それは何度か皮膚をすべり、甘噛みするようについばんできた。

「ぶっちゃけさあ、俺より友達の方が好きでしょ？」

妙にくすぐったくて、ぞくぞくするような痺れでふらつきそうになる。

「こ、この前いったじゃん。高橋さんの方が遊ぶ回数もメールも多いうって。ちよっ、やめて」

「その割に明里ちゃんの話ばっかだよな。告られたくらいで顔まっかになるし。そんな好みのタイプだった？」

「そんなんじゃないって……っ」

とにかく離せと彼の口を手でふさぐと、指まで甘噛みされてついひるむ。

その一瞬の隙にキスされた。

なんの根拠もなく、拒んでいれば唇にキスだけはされないというか、無理強いはされないだろうと思いこんでいたのでショックで放心してしまった。

好きな人にされて嬉しくないわけがない。

でも、それ以上に裏切られたという動揺のほうが大きかった。

せつかくあの夢はノーカウントにしていたのに。

口をこじ開けて入ってきた舌がからみつく。

反射的に身を引くが、頭と腰に手が回されていて逃げられない。

彼の胸をばしばしたたくと、体と体を完全に密着するようにされて身動きできなくなった。

さんざんキスされてわけがわからなくなったところ、ようやく高橋さんがはなれる。

怒っているのか喜んでいいのかよくわからない、熱っぽい瞳が間近でこちらを射る。

「好きだよ。俺の女にしたい。……これがさっきの答え。わかった？」

妖艶で嗜虐的な気配に肩が震える。

「う」

私はごしごしと口をぬぐい、

「た、た、高橋さんの……アホッ！」

走って逃げた。



## お姉ちゃん

家に帰って部屋にこもり、ベッドにつつぷして私はぼやいた。

「……友達に妬くことないじゃん」

嫌だつていったのにやめてくれなかった。

こっちも悪かったとは思うけど、普段ふざけていて優しい人があんなに豹変するなんて信じられない。

ちよつと、いやかなり本気で怖かったじゃないか。あのままやられるかと思った。

「なに泣いてんの」

ふり返ると、ノックもせずに部屋に入ってきたらしい姉が立っていた。

姉妹だから顔は似ているらしいのだが、インドアの私と違ってかなりアウトドア派で体育会系。

部活で鍛えた体は筋肉で引きしまっているし、髪型もベリーショート。

くわえて表情もがははと豪快に笑うか真一文字に口を閉じていることが多いので、あんまり似ていないとよくいわれる。

世にいう姉御肌ってやつだろうか。

「お姉ちゃん」

怒るのも忘れてひしつと抱きつく。また友達とテニスでもしてきたのか、ちよつと汗臭い。

ふと、別の体温と汗の匂いを思い出してしまつて反射的に頭をぶんぶんふつた。

好きだけど怖いし怖いけど好きだし、嬉しいのか悲しいのか、もうわけわかんない。

「だからなに？ いわなきゃわかんないでしょ。だれかにいじめられたの？」

親には内緒でと頼んで相談したら、姉は奇妙な顔をした。

「好きなの？」

「うん」

「じゃ、やらせてやれば？ 何発かやればほとぼりも冷めてがっつかなくなるでしょ」

ぎゃあああああああ信じられない。

「それが姉のいうこと！？」

姉があぐらをかいてふんぞり返る。

あ、ちよつと。そのどろどろ靴下で私のベッドに上がらないで。

「むしろ好きなのに嫌がるあんたがわからん。何度も相手の家にまで行ってるくせに……ある意味かわいそうな男だな高橋。公私とも常に生殺し状態か」

「だっ、だって、そういう理由で行ったんじゃないし。最初は全然そんな気配なかったし。私が嫌がることはしないって信用してたのに」

思い切り鼻で笑われた。

「アホくさ。ガキくさ。馬鹿馬鹿しい」

傷心の妹になんていい草だ。

「別に軽い女になれとはいってない。そんな事されても嫌いになれなくてウジウジウジウジかび臭く悩むくらい好きなら、後で傷ついたとしても後悔は少ないだろうってんの。あ、避妊はしなさいよ。生理だっつっても引き下がない男と避妊しない男にはやらせちゃいかん」

私ってけっこうチヨロイというか、単純かもしれない。

さっきまでとても落ちこんでいたのに、姉のこんな一言であつという間に立ち直ってしまった。

「そ……そうかも」

重く考えすぎていたのかもしれない。

台風が晴天になった気分だ。

「お姉ちゃん好き」

くつつくと、彼女はますますふんぞり返った。

「ふふん、敬え」

一時はどうなることかと思っただけ、姉のおかげでわりと心おだやかに次の家庭教師の日を迎えた。

肌寒くなってきた夕方。

私の部屋で机の前にすわり、返ってきた期末テストの束をわたす。

「最近、80点以下とったことない」

以前では考えられない点数である。

「ん。このままでも合格圏内だけど、どうせだから全教科90点以上めざすか」

間違えた所だけに軽く目を通していったあと、高橋さんがまじまじとこちらを見る。

「怒ってたんじゃなかったっけ？」

「まだ怒ってるよ」

「へー。なにかすんの？」

面白そうに高橋さんが問う。

「考え中かな」

まあ、その内に。

彼が笑って私の髪に手をのばす。その手が届くより先にドアが開かれた。

「お茶もってきたよー」

姉が軽いお茶菓子を机に置き、わしつと肩を抱いてくる。

「どおも初めましてえ。ひなたの姉の咲月です。よろしく」

心配して様子を見に来てくれたんだろうか。

「どーも。……姉妹だけあって、目が少し似てるね。雰囲気はぜんぜん違うけど」

爽やかにほほえむ高橋さんにほほえみ返しながら、姉はいった。

「こいつガキなんだから、あんま泣かさないうでやってね」

2歳しか違わないくせになにをいう。というか。

「お姉ちゃん」

泣いたってバラすな！

非難の視線を送るが、遅かったらしい。

「泣いたの？」

「無言でボロボロしくしくと」

「それでも優しくしてるつもりなんだけどな……泣くほど嫌か」

高橋さんが低い声を出して、恐怖がうつすら蘇った。

首に回された姉の手をそっとつかむと、彼女は死ぬほど面倒くさそうな顔を浮かべ、

「じゃー、あたしそこで見学してるから。気にしないでつづけて」

室内のソファに腰かけて漫画を読み始めた。

お姉さまありがとう。

「腹くくったんじゃないのー？」

高橋さんが帰ったあと、姉にこづかれた。

「怖気づいたな」

くくくと笑われたので、抗議の視線を送る。

「ム力ついたから、なんかやり返してからにしようと思ったの」

「……まあ、さっきのも十分嫌がらせにはなっただろうけど。そんなにあたしがいなくなったらどうするつもり？」

「えっ？」

不吉な言葉に目を開くと、彼女は意味深に苦笑した。

「世の中、なにが起こるかわかんないからね」

姉がトラックに轢かれたのは、その二日後だった。

よく交通事故があり、たまに車が横転していたりパトカーが停まっていたりするのを見かける通学路のカーブでのこと。

トラックの運転手によると、カーブを曲がった先に姉がいて避けきれなかったらしい。

直撃はまぬがれたものの服が引っかかり、20メートルほど引きずった所で止まったのだそうだ。

病院から電話がきて車にのって病院へむかうまではわりと冷静に「あその道はよく事故があるから通るなっというもいつてるのに」と母とブツブツいていたのに、病院に到着していくつものチュー

ブに繋がれて横たわる姉の姿を見たたん涙が止まらなくなった。姉は全身にすり傷を作り、左足を二針ぬった。頭部もぶつけてしまったようで、いまだに意識が戻っていない。

学校も家庭教師も休んで、病院に泊まりこんだ二日目。

一面まっしろな部屋でちよつと不気味だし、なれない所で寝泊まりするのも緊張するし、姉は目を覚まさないどころかうなされることすらなく、心細くてたまらない。考えたくないがまるで植物のようというか、生きている気配が感じられないのだ。体温すらもヒヤリとして冷たい。

それでも確かに心臓はまだ動いていて、それを希望に母と二人、交代で寝ずの番をしながら見守っていた。

そんなとき、学校帰りに明里と沙也がお見舞いに来てくれた。

二人の顔を見るだけでなんだかほつとする。

母は親戚に電話するために席を外しているが、もどってきたら喜ぶだろう。

「クマできてるじゃん。辛いだろうけど寝なきゃダメだよ」と沙也。

「うん……でも、寝ると怖い夢ばかりみちゃって」

「あるある、そういうとき。じゃあ、いつそメチャクチャ馬鹿馬鹿しい漫画や映画をみてみるとか」

「……ありがとう」

実はそれももう試したあとだ。

昔ペットロスになったときはそれで回復したのだが、なぜか読んでいる最中にぼろぼろ涙が出てきてしまっただけで集中できなかった。大好きな漫画も映画も小説も、人と会話しているときでさえ上の空になってしまうなんて自分が自分じゃないみたいだ。

必死になぐさめてくれる沙也をまえにただうなずいているとふと、

病室のドアの前で立ったままの明里が目に入った。

「明里？」

どうしたんだろうと近寄ると、犬の低いうなり声がした。

「ごめん。あたし入れない」

その顔はひどく青ざめ、冷や汗すら浮かんでいる。

彼女のぎこちない視線をたどって、思わず部屋から逃げ出してしまった。

「……ッ」

ベッドに横たわったままの姉の、首から上がなくなっていた。

まるで心靈写真みたいだ。

血は流れていないが、布かなにかで覆いかくされたかのように綺麗に頭部が消え、首と胴体だけが残っている。

そんなバカな。さっきまで普通だったのに。

見間違いじゃないか。見間違いのはずだ。

なんどもまばたきし、十秒でも二十秒でもじっと目をこらすが首から上が見当たらない。

どこへ消えてしまったのか。

「お姉ちゃん」

怖くてドアからうかがうようにしていたら、同じように青ざめた沙也が声もなく病室から出てきた。

彼女にも同じものが見えているのだろう。

もう頭が真っ白になって、食い入るようにそれを見つめるしかできないでいたら、背後から声をかけられた。

「友達がきてくれたの？」

「ひっ」

心臓が飛び出しそうになったが、そこには母が立っていた。

「お、お母さんあれ」

指さすと、姉は普通に病室のベッドで横たわっていた。

相変わらず意識はなく、ぐったりしていて呼吸があるかどうか不安になるような様子だがちゃんと頭もある。

ついまじまじとそれをながめ、二人と顔を見合わせた。

「さつきは」

明里がぼんと肩をたたく。また犬のうなり声がするが、だんだん気にならなくなってきた。

「気のせいだよ」

彼女は視線をあわせずうつむいている。沙也もかすかに震えている。

明らかに無理をしているが、

「……うん」

私もそう思うことにした。

二人が帰ったあと、私はおそろおそろ姉の頭に手をのばした。顔にすり傷はあるが、頭部に重症になりそうなものはない。

なのに彼女の額はゾツとするほどひんやりしていて、感触もまるで人形の肌を触っているようだった。土気色とはこんなだろうか。

「ひなた、そろそろ帰るよ。学校もあるし、ずっとここに泊まるわけにも行かないから……また明日こよう」

荷物をまとめて、すんと母が鼻をすする。

「うん」

ふと思いついて、腕にはめていたパワーストーンのブレスレットを姉の手首にかけた。

斎藤さんがくれたお守りだが、心霊的なものに効くらしい。

もしさつきの光景が霊的なものなら、これでなんとかならないだろうか。

姉の手首に通したとたん、ブレスレットはバラバラになって床へ落ちた。

まるで彼女は助からないと言われたみたいで、嫌な汗が背中を伝う。

「ひなた？」

母がいぶかしげに呼ぶ。

あわててブレスレットを拾おうとしたとき、ひときわ強い耳鳴り

がして、ぶつんとブレーカーが落ちたみたいに視界がまっ暗になった。停電にでもなったのかと辺りを見回していたら母が悲鳴を上げてナースコールを押し、私は失明したのだと知った。



## 目隠し

それからしばらく大変だった。

姉の事でまいつていた両親がとり乱しまくり、眼科を5件くらいハシゴさせられた。

どの眼科も、また総合病院でも「異常はない」と診断され、原因がわからないため「実は生まれた時から問題があったものが成長して出てきたのかもしれない」という医者もいた。

そんなこんなで、目が見えなくなつて早3日。

学校にも外にも行けず、家で退屈していたら高橋さんがお見舞いに来てくれた。

カギを開け、とりあえずリビングへ通してソファにすわる。

「良かった。お父さんは仕事だし、お母さんはお姉ちゃんの様子みに行つてからすこーく暇で」

見えないといってもそれ以外は健康だし、長年暮らしている自宅の中ならあまり不自由はない。

最初は食事、風呂、トイレ、階段の登り降り。なにをするにも人の助けがなければできなくて、小さな赤ん坊になつてしまったみたいな気分だったけれど、なにかを行うまえにまずぺたぺた触つてから行うようにしてみたらなんとかなつてきた。

家具の配置なども記憶できているし、外に出なければ大丈夫だろう。

そういう訳で留守番していたから助かった。

「思つてたより元気そうで安心した」  
軽く頭をなでられて苦笑する。

「周りがパニックになると、かえつて冷静になるよね。……ごめんね高橋さん。せっかく勉強教えてもらったのに、もう高校行けないかも」

進学校へ行くのだと期待していた両親にも、ずっと勉強を教えて

くれていた高橋さんにも申し訳なくて合わせる顔がなかった。もう一生両親に養ってもらわなければ生きていけないのだろうかと考えると、顔には出さないが泣けてくる。

「……俺がもらってあげようか？」

唇を指でなぞられて、この人相手に怒っていたのを思い出す。

急にはずかしくなつて身をよじると、肩をつかまれ、

「いい加減にしろ」

ゴンツと鈍い音がした。

「こいつに何かされたらいい。代わりに殴ってやる」

この声は斎藤さん。

「いたの！？」

無口だから気づかなかった。

「そうだ、斎藤さん。あのブレスレット、お姉ちゃんにかけたらバラバラになっちゃって」

事情を説明しようとしたら、

「んじゃこれやるよ」

舌打ちとともにブレスレットらしきものをかけられた。

「あ、ありがとう。でもそーじゃなくてお姉ちゃんが」

「遊んでないでとってやれ」

「ハイハイ。いわれなくてもやるっての」

高橋さんの気だるげな声がして、近づいてくる気配がした。なんだろう。

頭の上で風が吹いた気がして顔を上げると、目の前で高橋さんがほえんでいた。

「え？」

「見える？」

信じられない。

「どうして！？」

なんで？　なんで急に？　なんで！？

常にまっ黒にぬりつぶされていた視界に光がある。色が映ってい

る。それがこんなに嬉しいなんて思わなかった。

幻覚かと手をのばすと確かに感触がある。

医者でも治せなかったのにと呆然としていたら、どっかりソファに腰かけている斎藤さんがいった。

「運が良かったな。えぐられてたら治らなかった」

高橋さんの補足説明によると、小さな女の子の霊が私を目隠ししていたらしい。

それをとってくれたから、見えるようになったそうだ。

「ありがとう……！ もう一生このままかと思ってた！」

実は夜中に泣いたりもしたのだ。

感謝してもしきれない。この前のアレは忘れよう。

じんわり涙まで出てきて、ひたすら感激していたら、

「嬉しいか？ 一度は見殺しにされたんだぞおまえ」

斎藤さんのそんな一言で涙がひっこんだ。

「人聞き悪いな。俺はひなには害がないと思ったから」

「知ってて放置したんだよな」

「……どうということ？」

たずねると、いいにくそうに高橋さんが告げた。

「ごめん。咲月ちゃんのこと、わかってたんだ」

このまえ会ったときから、姉が祟られていて、なにか良くないことがおきるだろうと気づいていた。

同時にそれは高橋さんの手に負えないものだということも。

そして、祟られているのは姉で私には影響がないと思ったので見ないふりをしていたらしい。

「うかつに手だしたら死にそうだったから」

何度か病院へ見舞いに行こうとしたが、急用の電話がかかってきたり、目の前で交通事故が発生したり、飛び降りて電車が止まったり、車のエンジンがかからなくなったり、タイヤがパンクしたりなどにもない道でスリップしたりと、色々な事がおきて行けなかったそう。

「お姉ちゃんが祟られてるって、どうして」

「わかんねーけど、首がない人形が怒ってる。なんか悪さしたんだろ……てか、ひなは怒んないの？」

「命がけで赤の他人を助けるなんていえないよ。こうして目も治してくれたし、気にしないで」

なぜか高橋さんが苦しそうな表情をした。

「あああ、ひなのそーいうところが好き！ 大好きなんだけどそれすげー皮肉！」

「いつてやれいつてやれ。赤の他人で冷血人間って」

しかめっ面のまま斎藤さんがからかうように告げる。

「いや、嫌味でいったわけじゃないから。気にしないでいいよ」

本当に、と伝えると高橋さんが眉根をよせる。

「祟られたのがひななら助けた」

それはフオローになつてない。

「……うちのお姉ちゃん、もう助からないの？」

しんと静寂が流れた。

つまりそういうことだろう。

医者も手をつくしてくれているし、神だのみでもするしかないか。うつむくと、二人がつぶやいた。

「やるだけはやるよ。斎藤もよんだし」

「期待はすんなよ」

そういつてくれただけで十分だった。

空は今にも降り出しそうにどんよりとしていて、たまに雷の音だけが小さく響いている。

風も湿気をふくんで肌寒い。

まだ昼間なのに、嵐の夜みたいだ。

「ひなは助手席で」

高橋さんの車の後部座席にのろつとしたら車主がいった。  
なにかこだわりでもあるんだろうか。

助手席のドアに手をかけたとき。ロックがかかった音がしてつい高橋さんを見た。

「なんで力ギかけたの？」

彼が苦笑する。

「いや……俺はなにもしてない」

といいつつ車の屋根を見る。

斎藤さんがそこへ無造作に拳骨を落とした。  
痛そうな鈍い音がして、高橋さんがぼやく。

「へこんだらどーすんだよ」

「事故るよりマシだろ」

もしかしてなにかいたのかな、と思ったが深く考えるのはやめておいた。

再び力ギを開けて車内に入り、姉が入院している病院へついた。  
斎藤さんは人間の霊は苦手だが、人形やいわくつきの物には好かれやすく相性がいいらしい。

が、彼はぐったり横たわる姉を一目見るなり、

「無理」

といい切った。

「危ないと思ったらいつでも逃げてね」といったのは私だけど、  
すごく早かった……。

「そ……そう」

「相手が悪いな。これ　　の人形塚だろ。人形と子供がうじゃうじ  
や乗っかってんぞ」

なんだか姉の方からねばっこい視線を感じた気がして、悪寒が走った。

彼女はずっと眠ったままなのでそんなはずないのだが。

「とりあえず、気休めだけしてジジイに頼むか」

高橋さんが白い紙をとりだし、姉のベッドの下にぺたりと貼りつ

ける。

ちらつと見えたただだが手のひらサイズくらいで、人の形に切つたものに姉の名前とよくわからない文字が書かれていた。

まだ諦めたわけではないようだ。

うながされて廊下へ出ると、トイレから母が出てきた。

「ひなた!？」

視力が戻ったのを喜んでもらえたのはいいが、いい訳にもものすごく苦労した。

しどろもどろで説明していたら、途中から高橋さんがしれっと「ストレスで一時的に見えなくなつてたのかもしれないね」。家で愚痴きいてたらいきなり見えるようになって、どうしてもお姉さんの様子が気になるっていうんで連れてきたんです」とか「まだ落ちついてないみたいですし、ちょっと気分転換させてから家まで送っておきますよ」とかその他いろいろ助け舟をだしてくれて、それを聞いている内に母は納得したようで、最後には「暗くなる前に帰つてきなさいよ」とかいていた。

高橋さんって頼もしいけど、敵に回したら恐ろしい事になる気がする。

病院を出てから、だいたい一時間半くらいたつたころ。

そこそこ大きな神社へついた。

たしか観光名所にもなっている所で、私もお正月に一度だけ来たことがある。この天気のでいで人気は少ないもののちらほら参拝客がいて、境内はすんだ空気で満ちていた。奥へ進み、神主さんの住居スペースらしい所へ入ると白髪のおじいさんがこちらへ歩いてくる。

私とそう変わらないくらいの、小柄な人だ。

けわしい表情でしかめっ面なのに、目が優しくうだから不思議と愛嬌があつて怖くない。私服姿で、白い紙袋を抱えていた。

「それ以上入ってくんじゃねえ。また厄介事もってきやがったな。素人のくせに出しゃばるからだ」

高橋さんが苦笑する。

「悪い。こんどお礼すつからさー」

「しばらくこき使つてやる」

おじいさんぐつと眉をつり上げるが、なんだか親しそうだ。

以前いつていた神社やつてる親戚つてこの人だろうか。

「この子の姉ちゃんなんだよ」

高橋さんが私の頭をぼんぽんたたく。

おじいさんがちよつと表情をゆるめ、それからわざとらしく怖い顔をした。あんまり怖くない。

「嬢ちゃん、こいつのいうことなんか信用すんじゃねえぞ。こいつはな、修行もせず勝手に勝手に見聞きして覚えて生意気いいやがるし、そのくせたまに間違つてつから腹が立つ」

「は、はあ」

たぶん、高橋さんの師匠みたいな人なんだろうな、このおじいさん。

おじいさんは持っていた紙袋を斎藤さんに手渡した。

「人形には人形だ。清めてあるから上手く使え。酒と菓子も入れてある。あんたが持った方がいいだろう」

「ああ」

斎藤さんが短く答える。

この二人も顔見知りなんだろうか。

「事情を話してあったの？」

こつそり問うと、高橋さんが投げやりに答えた。

「いや。このジジイ、いつ来てもこうなんだ」

## 人形塚

車内にもどると、斎藤さんが紙袋から人形をとり出した。

陶器でできたおかつぱ頭の市松人形で、群青色の綺麗な着物をきている。大きさはだいたい50センチくらいだろうか。おつとりと優しそうな顔立ちだ。

斎藤さんが手馴れた手つきでその人形の服をぬがして、ぎよつとした。

どきりとするほど精巧に作られたまっ白な人形の肌があらわになり、マジックペンをわたされる。

「背中に姉の名前を書け」

身代わりにするんだらうと察しがついて、ほつとする。

人形など、こういった人を模したものは人にふりかかる厄災を身代わりに引き受け、人が無事に過ごせるよう祈って作られたものでもあると以前高橋さんがいつていた。

「なんかエッチなこと考えた？」

高橋さんにささやかれてカツと顔が熱くなった。

「ち……ちよつとドキツとしただけ」

こんな綺麗な人形を身代わりにするなんてもったいないけれど、姉の命には代えられない。

ごめんね。願います。

心の中でこつそり祈って名前を書くと、斎藤さんが人形の着物を着つけていく。人間の着物と同じくらい着せるのが難しそうなのに、完璧に元通りになっていた。なんて器用な。

その人形をもってまた車で1時間ほど移動し、大きくて古そうなお寺へついた。

こんな場所があるとは知らなかったが、人形供養で有名な場所らしい。木と瓦でできた門をくぐるとたくさん庭木が植えられた境内に大きな石塚があり、花や水、お菓子などが供えられている。台風



の前のような空模様のせいだ庭木に影がかかり、えもいえぬ雰囲気  
がただよっている。ぜったい夜にはきたくない場所だ。

斎藤さんが奥へ入って声をかけると、和服姿のおばさんが出てき  
た。

少々白髪が混じった黒髪をきちんと結びあげ、簡素だが上質そう  
な着物を上品に着こなしている。

キツネのような切れ上がった目をした、色っぽい女性だ。

「どないしはったん、お人形みたいな女の子つれて。あら、イケメ  
ンさんもおるやん。入り入り」

きやつと笑う。

第一印象と違ってかわいい感じの人みたいだ。

和室に通され、温かいお茶までいただいたあと彼女がいった。

「わたしここの住職の娘で、藤田公恵ふじたきみえいうねん。斎藤くんとは5、  
6年くらい前からの知り合いかな。別に弟子でも身内でもなんでも  
ないねんけど、この子忘れたところにきはるからな！。縁つてやつが  
あんねやるなあ。あ、あんたらは？」

私と高橋さんが名乗ったあと、イライラしたように斎藤さんが問  
う。

「高校生くらいのガキが人形の首おとしたりしなかったか」

藤田さんの表情がくもる。

「……あんたらの知り合いか。人形は怒ったら怖いからイタズラし  
たらあかんよ、って何度もいうたんやけどなあ」

お姉ちゃんのバカ。

本当にそんなイタズラをしたのだとしたら、意識がもどったあと  
しばらく説教してやる。

申し訳なくて頭が下がった。

「えらい臍屢にしてくれるとこのお嬢さんがお友達と見たい、いう  
から特別にあの人形みせたげてん。あ、あの人形いうのはちよつと  
難儀なやつでな。うちで毎年人形供養してるの知ってる？ それで  
きちんとやってんのに未だにオチてくれへんいわくつきの子なんよ。

しやーないから奥にしまつて、毎日お念仏あげてんねんけど」

「いそいでんだ要点だけ話せ」

斎藤さんがガンを飛ばすと、藤田さんは負けず劣らずの迫力でにらみ返した。

「人形蔵の大掃除やつてもらおか。あとこの前の台風で瓦とんだからそこもよろしくな。なんかまた台風きそうやし。それと運んで欲しい荷物がいくつかあんな。ああ、怖てさわれれへんから人形とりにきて欲しいいうてる檀家さんもいてたなあ」

うつと斎藤さんが面倒くさそうな顔をする。

「事が片づいてからな」

「今週の土日によつて」

チツと大きな舌打ちが響いた。

おお、斎藤さんがいい負かされた。なんかすごい。

「私も手伝います」

ぺこりと頭を下げると、藤田さんと高橋さんが同時にしゃべった。  
「なにいうてんの！ ぜんぶ力仕事やしオバケいっぱい出るしお嬢ちゃんにはムリよ。男にやらせとき」

「俺のときには手伝うつていかなかったのに酷くねえ？」

「た、高橋さんのもちろん手伝うよ」

「おまえにはムリ。足手まとい」

斎藤さんが事もなげに告げる。

そんなにハッキリきっぱりいわれると少しショックだ。力仕事はできなくても、雑用くらいはと思うのだが。

返す言葉もなくて大人しくしていたら、斎藤さんが少したじろいだようなまなざしを向けてきた。

「……なんか、いい返せよ」

「いや、事実だし」

情けない顔をしてしまいそうで目を合わせられないでいると、ぽんぽんと高橋さんに頭をなでられた。

「えらい気に入られてるなあ」

と藤田さんが笑った。

学生の子たちにいわくつきの人形を見せてあげたらそそくさと逃げ帰り、怪しいと思ったら人形の首がとれてしまっていた。

修理して丁重に供養したが、見学にきた5人の学生の内3人が怪我や病気に遭った。

あわてて謝りにきたその子たちのお祓いをしたが、住職の手応えはいまいち。

その後、彼らと連絡がとれないのでもしかして……と思っていたと藤田さんは語った。

「わたしは普段お世話しとるから平気やけど、高橋さんと保月ちゃんはこのでまつといたぼうがええと思うわ。昔、霊能者さん呼んで頼んだこともあんなけど、その人帰り道に事故で亡くなってしまったし。できるだけ見んぼうがいい」

「はい」

うなずいたが、

「いや、俺らも行きます。なんかもう目つけられてるみたいなんです。ついてったぼうが安全そうです」

と高橋さんがふすまを指した。

藤田さんがちよつと眉をあげ、ふすまを開ける。

うす暗い廊下に髪が不ぞろいにのび、ぼさぼさになった日本人形が立っていた。

ぱつと見ただけで背中がぞくつとくるような不気味な表情をしていて、今にも動き出しそうだ。さつき廊下を通ったときにこんなものはなかったし、他のだれかが置いていった気配などなかった。

まさか自分で歩いてきたのか。

「うわ……ほんまやなあ……この子もつれてこか」

藤田さんはひよいと人形を抱え、廊下を先導した。

なんでこの人たちだれも動揺しないの？

慣れきっている感じのその様子がちょっとだけうすら寒く、三人のあとをあわてて追いかける。あちこちの物陰に人形たちがいて、それらがじいっとこちらを観察しているような錯覚が襲う。

この建物は異様な気配に満ちていた。

広く開かれた本堂では、住職さんらしい年配のお坊さんがお経を上げていた。

つるりとした坊主頭のおじいさんで、袈裟とかいう黒い着物をきている。年のわりに体格はがっしりしていて、お腹がぽっこりモチのようにふくらんでいる。

その対面には緑の着物をきた、短いおかっぱの市松人形。

ちらりとその顔を見たたん、「あ、生きている」と思ってしまった。

おだやかにほえむそれは明らかに人形の顔ではない。あどけない５歳くらいの子がほえんでいるようにしか見えないのだ。そうとしか思えないくらい生氣にあふれている。目が合ってしまったてじわりと冷や汗をかいていたら、いきなりポロリと人形の首が落ちて転がった。

「ひッ!？」

反射的に高橋さんの腕をつかむと、彼がぼつりといった。

「さすがに迫力が違うな」

「おお？ お客さんか？ こんな天気にようきたなあ」

住職さんがふり返る。

「客やけど客ちゃうで」

藤田さんがもろもろの事情を説明し、斎藤さんが紙袋から人形とお菓子、お酒をとりだして住職さんにわたす。

「そらこつちもVIPの子供が巻きこまれとるし、これ以上人死にみたくないしでなんとかしたいのはやまやまなんやけど……お！ ええもん入つとるやん。これで機嫌なおるかなあお嬢」

住職さんは斎藤さんがもってきた群青色の着物の人形を抱えると、

緑の着物をきた、首のとれた人形のまえへさし出した。

直後、もってきた人形の首がとれた。

あどけない顔が転々と床をはね、ごろんと高橋さんの前で止まる。  
「あかんか。こんなけお経あげてお供え物もいっぱいして、よーしてるんやからそろそろ機嫌なおしてもええんちゃう？」

と住職さん。

新品同様だった人形の首がとつぜんとれる理由がまったくわからなくて、私はただ言葉を失っていた。それ以上に不気味なのが、住職さんが完全に人形を人間の子供あつかいしていて、周囲もそれを当然のように受け入れていることだ。あれはそういう人形なのだと、頭では理解していても感情がなかなか追いつかない。

この空間では私が異端なのだ。

「こんど新しい着物を買ってやるから。見逃してやってくれ」

聞いたこともないような、おだやかで優しい声音で斎藤さんがさやいてドキリとした。

乱れた人形の髪をそつとクシですき、首をはめて着物も整える。

不意に耳元で、

「あお……」

かすれるような女の子の声がして全身の毛が逆立った。

ぱつと横を見るが、そこにはなにもいない。

周囲のみんながほつとしたような顔でほえんでいるのが不思議だった。

「そーか、青い着物が欲しいんか。知らん子が綺麗なべきとるか  
らうらやましくなったんやなあ。……よっしゃ！ ほな着物代はうちで立て替えたるから、頼むで斎藤くん」

「ん」  
斎藤さんが人形を住職さんに返し、神社からもってきた群青色の着物をきた人形を庭でお焚き上げた。

これはもう役目を終えたのでいいらしい。残しておくとかえって変なものが入ってよくないとか。

住職さんと藤田さんに丁重にお礼と謝罪をして、私たちはお寺をさった。

家に連絡を入れたので大丈夫だとは思うが、空はすっかり黒くそまっけてしまっている。

時計をみると、すでに七時を回っていた。

「上手くいった……んだよね？」

なんだか実感がわかなくて帰りの車内でたずねると、高橋さんが笑った。

「交渉成立したからなー。まだ油断できないけど大丈夫だと思う。てか、斎藤のタラシ声に寒気がした」

「私もびっくりした」

目つきが凶悪だが顔たちは整っているし、男前って感じの魅力があるので優しく声をかければコロッといく女性は多そうだ。

「勝てねーから下手に出るしかなかっただけだ。あのガキいつか燃やしてやる」

斎藤さんが毒づく。

なにこの豹変ぶり。ずっとさっきみたいにしていればいいのに、もったいない。

「二人とも本当にありがとう。お姉ちゃんのためになん時間もかけて移動したり、いろんな人に頭下げ……下げてはなかったような気がしなくもないけど。すごく嬉しかった。大したお礼はできないけど、私にできることあったらいつてね。なんでもするから」

まだ姉の意識がもどったわけではないので安心できないけれど、例えば意識がもどらなくてもここまですてくれた事実ありがたい。

「馬鹿」

なぜか斎藤さんに怒られた。

高橋さんはだまってほくそ笑んでいる。

「できる範囲で、に訂正しとけ馬鹿。大馬鹿」

「え、じゃあそうする。訂正で」

よくわからないが、助言を聞いておいたほうがよさそうだ。

高橋さんが意味深に笑う。

「別にいいよ。セリフだけでも十分おいしい」

意味がわからないが、彼はちよつと変態っぽい気がしてきた。  
斎藤さんがあきれたようにぼやく。

「おまえ、二度というなよ。一生いうなよ」

その意味に気づいたのは、家について彼らと別れてからだった。

お手玉（前書き）

グロ注意です。



## お手玉

夜といつか朝といふべきか迷う、深夜2時44分。

姉が目を覚ましたと病院から電話がきて、身支度もそこに家族総出でかけつけた。

医師と看護師の会話だけがひびく病室で、彼女は白いベッドに腰かけ、足を組んでぼうつと天井をみつめている。短い黒髪は汗ばみ、体にはまだ脈拍計や点滴がつながれたままで、パジャマからのぞく素肌には包帯や絆創膏がはられていて痛々しい。けれど、その表情には生気がもどっている。

「お姉ちゃん！」

よぶとこちらに目をやって、気まずそうに笑った。

「ああ……なんか悪いね。心配かけたみたいで」

医者によると二日後には退院できるそうだ。

詳しい話を聞いたあと病室で一時間くらい家族でいろいろ話していたが、朝になると父はそのまま会社へ行った。私と母は家に帰っていた。また学校を休んでしまったが、非常事態だし目も治ったばかりだからと両親からは二つ返事でOKがでた。

そして、おやつ時くらいのこと。

母がまた親戚や学校への対応で席を外している間。

検査が終わって脈拍計も外れ、ベッドでごろごろしながら姉が事の顛末を語りだした。

夏休み中、友達の家に泊まりに行って遊んでいたら、近くに怖い場所があるから見に行こうという話になった。

古くなつた人形を供養する人形寺という所で、友達の親が鼻屑にしているから、そこに保管されているいわゆるくつきの人形を見せてもらえるのだという。

それで人形を見て、きゃあきゃあいいながら写真を撮ったりして

ふざけている内に友達のはじが当たり、人形を落としてしまった。

衝撃で首がとれてしまい、怖くなって逃げ帰った。

けして最初からイタズラするつもりではなかったのだと姉は念押しした。

信じてなかったわけではないけれど、高橋さんたちがいつていたことが本当に当たっていったのだと改めておどろく。

「素直に謝ればよかったのに」

つぶやくと、彼女はフンと鼻を鳴らした。

「同じ状況ならあんただって逃げるよ！ ぜったい」  
いはるな。

「だってさー、落とした張本人は半泣きでまっ先に逃げちゃったし。残りの3人も早く退散しよーって感じだったし。高そうな人形だったからね。弁償なんてできないし、あたし一人が責任とらされたら嫌だし、つい……まさか死んじやうとは思わなかったな」

「えっ」

「あたしこのまえお葬式行ったでしょ」

人形を落とした子が、駅のホームから転落して亡くなったのだそうな。

自殺ではないかという噂もあるが、姉はそう思っていないらしい。一緒に人形を見に行った3人も自転車で崖から落ちたり、高熱が下がらなかったり、調理中にありえない角度から包丁が飛んできて腕に刺さったりと次々不幸に襲われた。

「霊とか信じてないけど、あたしにもなんかあるかもとは思ってたねー。さすがに。まあこうしてケガだけで済んだわけだけでも！」

だからどーしてそんな偉そうなのか。

ふっと一瞬むなしそうな表情を浮かべて、姉が枕の下からなにかをとりだした。

「みて」

大量の黒い髪の毛。

「きっ!?!」

きもちわるつ。

彼女の抜け毛かと思ったがそれにしては短いし、姉は茶髪に染めている。

「なにそれ」

つい身構えると、彼女はポツリとつぶやいた。

「戦利品」

は？

車にひかれてから病院でめざめるまでの間。

姉は長い夢をみていたそうだ。

おばあちゃんちみたいな古くて大きな家の座敷で、小さな女の子がお手玉で遊んでいる。5、6歳くらいのおかつぱ頭に緑の着物姿、白目のないまつ黒な瞳で終始ほえむその顔を見て、座敷わらしだと思った。

「いちかけ、にいかけ、さんかけて」

座敷わらしはわらべ歌に合わせてばんぽんとお手玉を投げている。落としてもせず器用なものだとながめているうちに、それは小豆を包んだ布などではなく人間のパーツだと気づいて全身がぎくりとこわばった。ぞわぞわと冷たい悪寒が背中を逆なでし、声すらあげられない。

「姉さん姉さん、どこゆくの」

宙をまっっているのは葬式でみたばかりの友達の顔。生首だ。おびえてひきつったそれと目があって身震いする。胴体もないのにまだ生きている。身をすべて削がれて骨だけになっても生きている、活き造りの魚のようだ。

いつそ殺してやってくれ。

「切腹なされし父様のお墓まいりにまいります」

思い切りさけんで逃げ出したいのに体が動かない。

次に飛ぶのは女のうで。包丁が刺さった友達のうでだと直感した。ならば隣の目玉は崖から落ちて片目を失った少女のものだろう。お手玉にされているのはその三人。

高熱で寝こんでいた友達は助かったのだろうか。

「お墓の前で手を合わせ、南無阿弥陀仏となえます」  
歌が終わり、座敷わらしが手を止めた。

「次はお姉ちゃんの番」

さあ、と生首と腕と目玉をさしだしてくる。

断ったら自分もお手玉にされるのだろうか。

空気がねばつこいというか重いというか、まとわりつくようで気持ち悪い。無意識に肩がふるえ、冷や汗がだらだらと背筋を流れる。目玉を手のひらにのせられそうになって、ようやく声がでた。

「てか、あんただれ？」

座敷わらしはほえんだまま、だまっている。この表情しかできないのではないだろうか。さっきから少しも顔が動かない。

「知らない子とは遊ばない！」

「知らない子じゃないよ。前に遊んだよ」

「あんたなんか知らない」

「どうしてそんなこというの？」

いきなり至近距離につめ寄られて後ずさる。けれども生首たちが視界の隅に入って、カツと頭に血が上った。

こんなガキに殺されてやるものか。

座敷わらしの頭をつかみ、髪をむしってむしって無我夢中で引きちぎりまくってやった。途中で首に激痛が走り、視界がぐるっと回転して青い着物をきた自分の胴体が目に映り「首を切られた！ ちくしょうこの野郎ちくしょうちくしょう！」と怒り狂ったところで、病室のベッドで目が覚めた。

「そしたら手に髪の毛つかんでさー。みてよこれキモイったら」  
がははと姉が笑う。

私は両手で顔をおおっていた。

なんかもう、どこからつつこめばいいのか。

「……無事でよかったよ」

「うん！ ありがとう」

「それとまず、無謀すぎ。無茶すぎ。夢とはいえなんでそんな危ない場面でそーいうことしちゃうの。本当に死んでたらどーするつもりなの？ だからお姉ちゃんは昔からケガばっかしてるんだよ。女の子なのに殴り合いのケンカとかするし」

「だって友達をあんな風にオモチャにされたらムカつくじゃない。機嫌とって生きるより噛みついて死んでやるわ。死んでなんかやらないけど」

そんな風にいわれたら怒れないではないか。

「座敷わらしはいい妖怪だから、それとは違うと思うよ。その女の子って、お姉ちゃんの友達が壊しちゃった人形じゃないの？」

高橋さんと斉藤さんが助けてくれたこと、人形寺の人たちも困っていたことなどを話すと、彼女は小馬鹿にしたように笑った。

「あんたいつかつボ買わされるよ」

できれば姉も一緒に彼らへお礼をいつて欲しかったのだが、この顔を見るかぎりやめたほうがよさそうだ。

「もしそれが本当なら……その人形が身代わりになってくれたからあたしの首は無事だったってことになるね」

そんなつぶやきにドキリとする。

「あ。そっか、時間差はあるけどあのとき人形の首が落ちたのは……そういうことだったのかも」

単に着物の柄を妬んで首を落としたのかと思っていた。

だとしたら、身代わり人形を作るのがあと少し遅れていたらどうなっていたんだろう。

急にまた不安になってきて、明るい話題に切り替えた。

それからしばらく後に聞いた話だが、高熱で寝こんでいた姉の友達も同じ夢を見ていたそうだ。

古くて大きな座敷で着物姿の少女にお手玉をせがまれ、泣く泣くグロテスクなお手玉で遊んでいた。

途中で嫌になって「帰りたい」と訴えると「ダメだよ。お姉ちゃんはずっとここにいるの。ずっとずっと遊ぶんだから」と告げられ

てもう発狂しそうだった。熱が下がった今はその夢を見ることもなく、元気に暮らしている。

けれど、もう一生日本人形は見たくないといっているらしい。

後日、休日の昼さがり。

直接お礼がいたくて、高橋さんのマンションへむかおうとしていたら、出がけに母が「これ親戚に送ったやつの余りだけど、もって行きなさい」とお茶菓子をいくつかくれた。

「友達の家に遊びに行ってくる」としか説明していないのだが、なにかいいかげんな顔でみつめられる。

「咲月がおきない時にね、何度か気持ち悪い影を見たんだけど、いつのまにか見なくなっただよね。あんたなにか知らない？」

明里や高橋さんほどではないが母にも靈感があり、勘がするどい。高橋さんたちのことを話そうかと迷ったが、やめておいた。

姉は当事者だからいいが、それ以外の人に話すと高橋さんが嫌がりそうだと思うからだ。病院で母と会ったときも霊の話はかくしていたし……今思い返すと、明里と沙也に話していたと知ったときも彼はひそかに嫌がっていた気がする。特に口止めもされていないし、出会ってまもないころの私に軽く話したくらいだからわりと他人に話しているのかと思っていたが、そうでもないのだと最近ようやくわかってきた。

「知らない」

とだけ答えて、家を出た。

マンションには斉藤さんも訪れていて、ちょうどよかったので二人にお茶菓子をわたすと共に礼を告げた。

「力仕事は無理だけど、掃除とかお使いくらいなら手伝えるからいくらでもいってね」

「じゃ、来週の土日てつだってもらおうかな。ついでにジジイを紹

介してあげよう。あれでなかなか面白い人だから」

と高橋さん。

「うん。土日あけておくね」

「斎藤もくるか？」

「俺は俺でいそがしい」

心なしか疲れているようだ。午前中に一仕事おえてきたのかもしれない。

「あ、肩もむよ」

手伝いを押し売りしても鬱陶しいだろうし、このほうがいいだろう。

斎藤さんが一瞬「は？」という顔でこちらをにらんだが、けっきよくなにもいわなかったので気にせず手をのばした。

「意外とこつてないね」

マッサージ素人だが、たまに母や姉ともみあいつこしているのどこつているかどうかくらいはわかる。

幅の広い肩はしっかり筋肉がついていて分厚く、つかむのに苦労した。

「なんで斎藤には自分からさわる……？」

高橋さんが恨みがましげにつぶやく。

「犬でもネコでも、追いかけて回されると逃げたくなるものだよ高橋さん。他意はないしね」

「そして逃げられると追いたくなるという無限ループに陥るわけだ。俺の肩ももんで」

「あと2分」

私の代わりに斎藤さんがぼつりといった。

お気に召したらしい。

ちなみに、高橋さんの肩はガチガチにこつていた。

## 寝言

「じゃあな」

用事が済んだらしく、斎藤さんが帰ろうとする。

「高橋さんの家だから私がいうのもなんだけど、斎藤さんもたまにはゆっくりしていけばいいのに」

まだ午後三時にもなっていない。

何気なくいうと、斎藤さんが靴をはきながら横目でこちらを見た。切れ長の瞳に私の顔が映る。

「殴って欲しいか？」

「え！？」

「あいつ」

ちらりと視線を高橋さんに動かす。

高橋さんはじとーとした目で静観している。

「ううん、別に」

どうしてそういう話になるのか。

首をふると、彼は黙って出ていった。

ボタンと無情にドアが閉まる。

もしかして、高橋さんと私がちょっと微妙な空気になっているのに気づいていたんだろうか。

「えーっと、じゃ、私もそろそろ帰」

「なんで？ まだ来たばかりじゃん」

するりと腰に腕が回される。

後ろから抱きすくめられて、顔が熱をもった。

「……こういう流れになるかと思ったからだよ」

「わかってて来たんだ？ 期待には応えないとなー」

耳たぶをかむんじゃない。

確かに姉の言葉で「いいかな」とは思っちゃったけれど、やっぱりちよつといざとなるとひるむというか、斎藤さんがいてホッとし



ていたのに。

「寝不足なら大人しく寝てなよ」

「昨日は薬なしで寝れたし平気」

「え？ 眠れるようになったの？」

「ん？ 前から薬飲まなくても眠れるときはあるよ。眠れないときのほうが多いっていうだけで」

「へー」

いつか治ればいいのに。

なんて思っていたら大きな手のひらが胸にふれてきて、体がこわばる。

「俺けっこうつくしてると思っただけど。ご褒美くれない？」

いちいち言い方がはずかしいのはなんとかならないのか。

ああもう、頭が混乱してきた。

「高橋さんのことは好きだよ。でも今つき合つと恩があるから嫌々つき合つたみたいで変つていうか」

「変じゃない変じゃない。ひなは本気で嫌なことはハッキリ断るって知ってるし」

彼は笑って正面にまわると、顔を近づけてきた。

「……」

かなりかなりかなりはずかしかったけれど、大人しく目を閉じる。

熱をもった感触に背筋がぞくりとした。

ふれるだけのキスなのに頭がぼーっとしてしまつて、そのままとろんともたれていたらテーブルに置かれた高橋さんのケータイから着信音が高らかに鳴り響いた。

電話のようだ。

ぼんやり我に返ると、服を着たままブラのホックが外されていて、スカートの中で太ももをなぞられていた。

「んん……！？」

いつのまに。

おどろきながら唇をはなすと、再び口づけられそうになる。

ケータイはずっと鳴り続けている。

「な、鳴ってるよ」

「無視だ無視」

「緊急かもしれないでしょ」

私のパンツをずり下ろそうとしていた手をぺしっと払いのけると、彼はがくりとうつむいた。

「しょうもない用件だったら殺す……！」

彼が電話に出たとたん、回線の向こうの声がかすかにこちらまで聞こえてくる。

内容はよくわからないがひどくあせっているようだ。

重要な用件らしく、高橋さんが眉根をよせる。

「……なんかいそがしそうだから帰るね」

そそくさと乱れた服をもどし、小声で告げて私は部屋を出た。

まだ明るいのに、外は冷たい風が吹いている。

さわられていた感触がまだ生々しく残っていて顔から火が出そうだったから、ちょうどよかった。

「また今度つづきしょ」

「……」

帰宅すると同時に届いた高橋さんからのメールに返信できないまま数日が過ぎ、家庭教師の日になった。

彼がやってきて、いつも通り私の部屋でテキストを広げる。

さすがに授業中は怪しい雰囲気になることもなく、むしろちよつとスパルタ気味に勉強が進んだ。怒鳴ったりキツイ言葉を吐かれたりすることは一切ないが、ちよつとトゲのある言葉が入ったりお説教が長引いたりする。すでに志望校の合格圏内の成績なのだから現状維持でいいじゃんと思うのだけれど、それが彼にとっては「もっ

「たいない！」らしい。受験シーズンが迫ってきたからってそんなに気合入れてくれなくていいのに。

「そうそう、神社の手伝い土曜日になったから。朝むかえに行く」

一息入れたとき、コーヒーに口をつけて高橋さんがいった。

「うん。なにすればいいの？ 掃除とか？」

彼はニヤリと笑う。

「面白いもんが見れるよ」

あれ、ちよつとやな予感。

「こ」

怖いのは嫌なんだけど、といおうとすると同時にちゅつとキスされて心臓がはねる。

「さ、勉強勉強」

高橋さんが楽しげに机に向き直る。

話をそらされた気がしなくもない。

約束していた土曜日の朝。

霜が降りたせいか、辺りには白くもやがかかっている。風景がはつきり見えないからか、まだ頭がしゃつきりしていないせいかな夢の中のように現実感がない。

そんな中、移動中の車内で高橋さんが問う。

「寝言に返事しちゃいけないって話、知ってる？」

「聞いたことある。おきられなくなるとか、死ぬとか」

迷信だとは思っけれど、とても試す気にはなれない。

「じゃ、寝言とケンカして負けちゃいけないってのは？」

「ケンカ！？ 寝てる人とケンカなんてするの？」

「できるみたいなんだ、それが」

ある所に同棲中の大学生カップルがいた。

女のほうは普段から寝言が多くて、男はたまに話しかけたりして

いた。寝ているのにおきえるときと変わらない返事をするのが面白かったらしい。

ある夜。

同棲しているマンションでいつもどおり眠る女に話しかけていたら、つまらないことでケンカになった。確か女が男友達と遊びに行ったけど、男も女友達と合コンに参加してたとか、そんなことで。「俺からしたらお互いさまじゃんって感じなんだけど、気が弱いうえに口下手な男だったらしくてさ」

女は男友達とちよつと昼食と一緒に食べたただだが、合コンは明らかにそういう目的の場所だし恋人がいる身で行くべきじゃない。男のほうが悪い。

そう押し切られて負けてしまった。

さすがに不愉快に思い、男も布団にもぐって目を閉じた。

直後、女が布団から半身をおこす。

なんだ、途中からおきていたのか。

そう思ったが様子がおかしい。

上半身をおこしてまっすぐ前を見つめたまま、一言も口を利かないのだ。

寝ぼけているのか？

肩をゆすつて名前を呼んでも反応しない。目を開いているのになにも見ていない。よく知っている彼女ではなく、言葉が通じないなにかと向かい合っているようで身の毛がよだつ。そのままずっと話しかけていたら、バタンと倒れるようにまた眠った。

翌朝、問いただしてもケンカしたことも上半身だけおこしたことも覚えていない。

けれどそれから女は変になった。

おきている間は普通なのだが、夜中の二時ごろになるといつも上半身だけおこしてじつと前方を見つめる。そうしているときは呼びかけても返事をせず、まばたきもしない。だいたい5分くらいするとバタツと倒れるようにまた眠るのであまり気にすることもないか

と思っていたが、それだけではすまなかった。

二週間くらいしたころ。

まだ空が暗い早朝に物音がして男が目覚めると、玄関から女が入ってきたところだった。

夜中にどこかへ出かけていたのか。

たずねるより先にぎよつと目を疑う。

女は全裸だった。

汚れた素足で室内へ上がる彼女に声をかけてもまるで反応がない。目は開いているのにぼうつとした顔で寝室へ行こうとする。だれかに暴行されたんじゃないかと心配になってほおをたたくと、今目が覚めたというように我に返った。

「痛い！ なにすんの！」

「そんな格好でどこ行つてたんだよ！」

「格好つてな……！？ なんであたし裸なの？」

女はなにも覚えていなかった。

暴行を受けたような形跡はなかったので少しだけ安心しつつ、事と次第を説明する。

「おまえどうしちゃったんだよ。おかしいよ」

ため息をついた直後。

「うるせえな」

まったく知らない男の声で女がいった。

「えっ」

とつさに後ずさったときには女はいつもどおりに戻っていて、不思議そうな顔をしていた。

それから女は毎晩夢遊病のごとく歩きまわり、今も精神病院に通院している。

「精神病院は行ったほうがいいと思うけど、お被いにも行ったほうがいいんじゃない……」

怖い話だとつぶやくと、高橋さんが満面の笑みで告げた。

「うん。だから今日くるんだ」

え。

「ちよつとー！？ 今日つて今から行く神社に？ お被いしに？

私ただ雑用とか掃除とかするつも、つもりでっ」

「面白いもの見れるっていったろ」

「バカー！ 私怖い話は好きだけど心霊スポット行ったり自分が怖い目にあったりするのは嫌いなんだつてば。このまえはうちのお姉ちゃんを助けてもらうためだったから我慢してたんだよっ」

なにが楽しいのか彼は爆笑している。ひどい。

「大丈夫。見るだけ見るだけ。ひなはなにも怖くないつて。最近俺のマンションから一人で行き帰りできるようになつたし、幽霊にもなれてきただろ？」

「……マンションはちよくちよく行くから、なれたといえばなれたけど。エレベーターとかはともかく、まだ玄関がちよつと怖いかな」  
「あ、うん。エレベーターのやついなくなつたんだ。少し前に引っこしてきた5階の人についてる」

「やめてマンションの話は聞きたくない」

ただでさえ寒いのに。

「高橋さんつて私を怖がらせて面白がつてない？」

「うん。楽しい。怒らせるのも好き」

即答だ。

「……私は優しい人が好きだな」

いつもニコニコしていて、なにをいっても怒らないような感じが理想だ。

「ん？ 俺優しいだろ？」

うわ、自分でいった。

「優しいけど、ちよつと意地悪」

「嫌い？」

このまえ伝えたはずだ。

はずかしいからあまり口にしたくないのだけれど、予想外に真剣な顔で見つめられてドギマギした。

「すすき」

すすきってなんだ。噛んだ。

ぎゃあああと赤面していたら、

「俺も」

とキスされそうになって、つい両手で彼の顔を押しもどした。

「前見てて。運転中でしょ」

「いま信号まちだし」

「見られたらどーするの」

「だれもよその車内なんか見ないって」

「やだ」

高橋さんがようやく身を引いた。

「シャイだなー、ひなは」

シャイでけっこう。外でべたべたするのはどうかと思う。

ひそかに憤慨していたら、彼が話をもどした。

「心霊スポットとか除霊見学とかってさ、一人で行ってもつまないんだ」

「斉藤さんで行けば？」

なんだか微妙そうな顔をする。

「三人ならともかく、あいつと二人で行っても全然面白くない。誘ってもたぶんこないし」

仲がいいのか悪いのか、よくわからない二人だ。

「一緒におがみ屋みたいなことしてるくらいだし、仲いいんじゃないの？」

「いや、別に嫌いじゃないけど好きでもないというか。お互い利害の一致で手くんだけだから」

「……」

聞くんじゃないかったかもしれない。

男の友情に対するあこがれみたいなものに、ほんの少しヒビが入った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4345u/>

---

カテキョ怪談

2011年10月10日03時12分発行